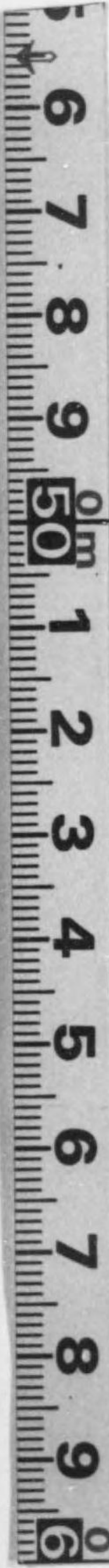


910.2-F67-3ウ



1200500754242

0.2  
67  
3



始



910.2  
F67  
3



# 古典の歴史

毛田出版社



明治天皇御製

いにしへの文の林をわけてこそ

あらたなる世の道も知らるれ

## 序

古典は、いかなる批評にも堪へ、いかなる時代をも凌いで、わが國の歴史と共に貫通してゐる一つの生命である。それ故、古典の道によつて、われわれは、遠く一千年の祖先の心にも直面することが出来るのである。

本書を古典の歴史と名づけたことは、巻頭の長篇によつたものであるが、それ以下にも、本書に収めたものの中には、古典について語り、古典の精神を基調として物を観、事を論じたことが多いのである。但し、古典と云つても、これを文學としての面より観、取り扱つたものが多いので、古典文學の歴史とでも云つた方が、もつと正確であつたかも知れない。

巻頭的一篇を、本書の總論的位置にすゑて、以下は、各論といふ體裁で、國學、古典、詩歌、國語の四編にわけたが、もとより、これらのいづれもが連關して、古典の

意義に觸れ、私の古典に關する考を明かにすることであらう。

古典の中では、教育に關する問題が多く取り扱はれてゐるのは、國民教育と古典との連關の重要性を思つたからで、教育の意義と價值とが大きく認識せられなければならぬ。それは現代において特に必要なことである。又、詩歌を別に設けたのは、わが國の文學においては、詩歌はその中樞に居る最高位置を占めるものであるからで、私も亦、自然これを取り扱つた文章が多いのである。

これらは各、一貫したまとまりを持つものではないが、それぞれの問題について、大よそ種々の方面の事がら取り扱はれてゐるつもりである。

その中には、時勢について論じたものもあつて、これには現代の病弊に觸れ、警世の意味をも含めて執筆した論文も交つてゐるから、今日及び將來のわが國の文化についても多少の啓發たり得るであらう。かやうに本書の中には、今日の問題を聊かでも、念頭において書いたものが多く、それらは又、私の立場、態度、思想といふもの

を明かに表明してゐるわけである。

古典學者としての私の教養が、又同時に現代に處する一國民、むしろ一臣民として、いかに生かされるべきであらうか。私の考へ方に賛成する人も、さうでない人も、この根本の生きる道においては同じでなければならぬ。古典を通じて、私は、その道の精神を確立し、これを發揮したいと思ふ。

昭和十六年中秋

著者

### 古典の歴史 目次

## 序章 古典の歴史

序	説	二
上代文學	.....	一五
平安時代文學	.....	三三
鎌倉時代文學	.....	六二
室町時代文學	.....	七三
江戸時代文學	.....	九二
明治・大正時代文學	.....	一一八
目次		五

目次	六
結語	二九

## 第一章 國學に就いて

國學の意義	一三
國學の精神	一四七
國學の道統	一五四
學問の呼稱	一六一
歴史の潮流	一七七

## 第二章 古典に就いて

古典と現代	一八二
愛すること	一八七

國文學研究の精神	一八九
日本の理想と國語教育	一九一
古典文學の教育的意義	二〇〇
古事記の國民教育的意義	二二
萬葉集の教育的意義	二二六
平安文學史概説	二三〇
源氏物語の日本の性格	二三七
源氏物語の價值	二四〇
源氏物語と小學讀本	二四八
會我物語と復讐精神	二五三

## 第三章 詩歌に就いて

和歌史上の革新時代……………二六四

和歌史上に於ける現歌壇……………二八〇

轉換期の歌人……………二九三

愛國和歌概説……………三二〇

近世和歌史概説……………三二八

信州の二歌人傳……………三三七

婦人の生活と文學……………三三八

學生と短歌……………三四一

芭蕉の學識……………三四五

現代歌謡の再檢討……………三五五

### 第四章 國語に就いて

國語運動に對する希望……………三七二

國語の純化運動……………三八一

國語問題より見たる新語……………三九二

國語國字の問題……………四〇五

ことば談義……………四〇八

目次終り



序章

古典の歴史



序 説

わが國の文學の歴史は、わが國の歴史と同様に、悠々たる生命を持つてゐる點において、世界に類が少く、その間に、種々の豊富なる文學の形態を作り出し、多數のすぐれた作家・作品を出してゐるのである。それらは、或はまこと、まごゝろを重んじ、或は優美、典雅な情趣を貴び、時に強く、時に優しく、時代に從つて變化してゐるが、それらの特色を通じて、日本的な性格、日本國民としての獨得の精神、思想の認められる事に至つては一貫したものがあるのである。

また、わが國の文學は、それが一種の古典性を具へてゐるといふ事を注意すべきで、奈良時代から平安時代にかけて現れた代表的な作品は、古典性を完成させてゐるが、それらの作品の影響といふよりもむしろ力強い復活が、いつの時代にも文學の頹廢墮落を防いでこれを甦生させ、新しい文學の基礎となるとともに、又、そのやうにして、いつの時代の文學でも、古典に對する憧憬を心の底に湛へてをり、古典からの流れが、ずつと現代にまで血筋をひいてゐるのであつて、この點では、

甚だ古典から縁の遠いやうに思はれる今日の文學でも、やはり無縁のものではない。かういふ意味で、わが國の文學の歴史は、古典的性格を備へ、そこに文學傳統の力強い足どりを求めることが出来るのである。かくて、わが國の文學史は、古典文學の歴史であるといふことも出来、少くとも、古典的性格の文學の歴史が、文學史の中心でなければならず、又、そこに傳統長きわが國の文學の獨自性、即ち日本的性格も存在するのである。こゝにいふ文學史も、このやうな性質を持つ古典の歴史でなければならない。

右のやうな意味で、文學の歴史を、

- 一、上代文學（神代—桓武天皇、一千四百五十年以上）
- 二、平安文學（桓武天皇—後鳥羽天皇、約四百年間）
- 三、鎌倉文學（後鳥羽天皇—後醍醐天皇、約百四十年間）
- 四、室町文學（後醍醐天皇—後陽成天皇、約二百七十年間）
- 五、江戸文學（後陽成天皇—孝明天皇、約二百六十年間）
- 六、明治大正文學（明治天皇—大正天皇、約六十年間）

【参考】

- 一、神武天皇御即位元年（紀元一・西暦前六六〇）
- 二、平安京奠都延暦十三年（一四五四・七九四）
- 三、鎌倉幕府創立建久三年（一八五二・一一九二）
- 四、吉野遷幸延元元年（一九九六・一三三六）
- 五、江戸幕府創立慶長八年（二二六三・一六〇八）
- 六、東京奠都明治元年（二五二八・一八六八）

の六期に分つて、それぞれの時代の文學の特色を考へながら、その變遷のあとを辿るとともに、特に、日本的な性質や古典的性格に注意して、これを見て行きたいと思ふ。

## 上代文學

### 口誦文學と記載文學

わが國は、太古には文字がなかつたと云はれ、或は又、神代文字といふ文字があつたとも云はれてゐる。併し、文字の有無にも拘らず、口から耳へと傳へられる歌や物語は、太古からあつた。その後、支那朝鮮から漢字が輸入せられ、その漢字で、歌や物語が書き現されるに至り、文字で記載せられる文學が存在する事になつた。かうして、口誦文學から記載文學に進歩したのである。

### 古代の歌

古代の歌は、素朴で健康であり、極めて明るい感じに富む。併し、歌の形は雜然としてゐて、未だはつきりとした形を持つてゐなかつたが、その中から、自然に一定の形式が定まつて來て、短歌

形式が発達し、これが最も優勢であつたが、その他にも、長歌・旋頭歌等の諸形式が行はれた。

【参考】

- 片歌 五七七
- 短歌 五七五七七
- 旋頭歌 五七七五七七
- 長歌 五七七五……五七七
- 佛足石歌體 五七七五七七

次に諸種の形式の歌を掲げよう。

はしきよし我家わがへの方ゆ雲居立ち來もくにしむびきた（思國歌）||片歌

（日本書紀では景行天皇御製、古事記では倭建命御歌と傳へる歌。なつかしいわが家の方から雲が棚びいて來ることだ。）

あたらしき章名部むなめの工懸たくまけし墨繩、汝しが無ければ誰か懸けむよあたらし墨繩||旋頭歌

（日本書紀雄略天皇卷に出た大工等の歌。惜しいものだ、章名部の工匠が墨繩を懸けて建てた建物。あの章名部の工匠が無かつたなら、誰が建てようか。その工も居なくなつたから、もう墨繩もだめだ。）

いかなるや人にいませか岩の上を、土と踏みなし足跡あとのけ残るらむ貴くもあるか（佛足石碑歌）||佛足石歌體

（光明皇后の御作と傳へる。釋迦はどういふ人でいらつしやるやら、石の上をまるで土のやうに踏みつけて、足跡を残されたのであらうか。貴いことではある。）

古代の物語

物語は、主としてわが國の發展して來た歴史に關して語るもので、皇室の御物語と民間の物語とがあり、皇室の御物語を中心としてこの両面が合致し、ここに全き國家の歴史が形作られてゐるのである。その中には、國體の根本、皇國の由來に關する尊嚴、且貴重な物語が豊富である。

これらの歌や物語を漢字で記載した書が「古事記」と「日本書紀」とである。これは、當時わが

國が大いに發展し、外國とも交渉が頻繁になつて來た結果、國民的自覺が高まつて、國家の歴史の結成を必要としたから、撰定せられたものである。

古事記

『古事記』は元來、天武天皇の思召によつて撰ばれたもので、稗田阿禮が誦したのを、後に元明天皇の勅命で太安萬侶が記した書である。和銅五年に成つた。當時漢字の使用に馴れず、安萬侶は非常な苦心をして、漢字で、出来るだけ國語を表現しようとした。此の書が 天皇の御意より出てる事は、特に注意しなければならない。

次に掲げる文章は、『古事記』の冒頭の一節である。

天地初發の時、高天原に成りませる神の御名は、天之御中主神、次に高御産靈神、次に神産靈神、此の三柱の神は、皆獨り神成りまして、御身を隠したまひき。次に國稚く浮脂の如くにして、海月如す漂へる時に、葦芽の如く、萌え騰る物に因りて成りませる神の御名は、宇麻志葦芽比古遲神、

次に天の常立神、此の二柱の神も獨り神成りまして、御身を隠したまひき。

上の件、五柱の神は別天神。

(宇宙の最初の時、高天原に現れ給うた神様の御名は、天の御中主の神(宇宙の中心であり主であらせられる御神)、高御産靈神(高大な萬物を産み出だし給ふ靈力の御神)、次に神産靈神(神々しい萬物を産み出だし給ふ靈力の御神)にまします。この三所の神様は、皆獨立の神様として現れ給ひ、御身體を幽冥にお隠しになつた。次に、國土はまだ固まらず柔かで、水の上に乗んでゐる脂のやうであり、海月のやうに漂うてゐる時に、葦の芽のやうに、勢ひよく生ひ出でる物體によつて現れ給うた神様の御名は、宇麻志葦芽比古遲神(立派な葦の芽のやうに現れ給うた物の主の御神)、次には天の常立神(天に永久にまします御神)、この二所の神様も獨立の神様として現れ給うて、御身體を幽冥にお隠しになつた。以上述べた五所の神様は特別の天神にまします。)

日本書紀

『日本書紀』は、物語を漢文で書き現し、支那の史書にも劣らぬ、すぐれた史書がわが國にもある事を示されたもので、舍人皇子が編纂の總裁となられ、廣く諸種の古傳を包括しようと試みられた。『古事記』が出来た後九年、元正天皇の養老四年に成つた。

記紀歌謠

これらの物語の間には、その内容に關係のある數多の歌謠が織込まれてゐて、物語を非常に興味深くするとともに、それらの歌謠を獨立して味つても、甚だすぐれたものがある。これを記紀歌謠と云ふ。記紀歌謠の中には、久米歌とか夷曲とかいふ曲名の附いてゐるものがあり、和琴などに合せて歌はれたのである。『琴歌譜』といふ書には、記紀歌謠を補ふ歌が出てゐる。これらの歌の中には、國家を讚美する祝歌や、勇壯な軍歌などがあつて、明朗快活で、且素朴健康な古代の日本人の生活がそのままに現れてをり、われわれの祖先の純粹な精神に接することが出来る。

みつくし久米の子らが、粟生には葦一莖、其根が莖其根芽繋ぎて撃ちてし止まむ（久米歌）

（神武天皇の御製。當時の軍隊である久米部の軍歌。威勢のいい久米部の兵士たちが植えてゐる粟畑には、臭い葦が一本生へた。その根の莖と、根と芽とを一しよにして、撃ちとつてしまはなければおかぬ。あくまでも敵を撃破しよう。）

大和は國の眞秀處、たゝなつて青垣山こもれる倭しうるはし（思國歌）

（日本書紀は景行天皇の御製、古事記は倭建命の御歌と傳へる。大和はわが國の中でも最もすぐれた土地だ。疊まり重なりあつた青い垣根のやうな山々に包まれてゐる倭は美しい處だ。）

空みつ大和の國は、神からかありがほしき、國からか住みがほしき、ありがほしき國は秋津島大和（讀歌）

（『琴歌譜』に出た歌。大和の國は神の作られたせむか居りたいところ、國のよいせむか住みたい土地、住んで居りたい國は實に、わが秋津島大和だ。）

以上は記紀歌謡の中でも代表的な歌で、敵に對してあくまでも戦つて撃滅せんとせられる勇壯な御精神、或は國土を讚美あそばされた懷郷の御精神を拜すべきである。

風 土 記

『古事記』と『日本書紀』とは、皇室を中心とし奉る國家の歴史であるが、その他に、地方の地理や生活や地方に傳へられる物語を記載した『風土記』がある。元來これは、元明天皇の御時、各國に命じて調査せしめられ、全國から『風土記』を撰んで朝廷に奉つたものと思はれるが、現在、古風土記としては、出雲・常陸・播磨・肥前・豊後の五國があるだけで、しかも完全な書としては、『出雲風土記』が残つてゐるのみである。とにかく、これによつて、古代の地方の状態を知る事が出来る。又『風土記』の中にも古代の歌謡が出てゐる。わが日本の全き姿を知る上には、記紀と並んで、この『風土記』も重要な性質を持つものであり、殊に、それらが、天皇や倭建命のごとき方々の、地方を巡狩あそばされた物語を傳へてゐることによつて、中央と地方の結ばれた、國家の一體となつてゐる様相を見のがしてはならない。

次の文章は、『出雲風土記』の意宇郡の初の條の一節で、上代風の文章表現の最も美しい所、又、わが國の成長にも觸れてゐる内容を味つて理解すべきである。朝鮮は太古よりわが國と一つであつた。

意宇と號くる所以は、國引きませる八東水臣津野命の詔りたまはく、八雲立つ出雲の國は、狹布の稚國なるかも、初國小さく作らせり。故作り縫はんと詔りたまひて、栲衾新羅の御埼を、國の餘り有りやと見れば、國の餘り有りと詔りたまひて、童女の胸紐取らして、大魚の腮衝き別けて、幡薄穂振り別けて、三縷の綱打ち掛けて、霜葛くるやくるやに、河船のもそろもそろに、國來國來と引き來縫へる國は、古津の打ち絶よりして、八穂米杵築の御埼なり。此くて堅め立てし枝は、石見の國と出雲の國との堺なる名は佐比賣山是なり。亦持ち引ける綱は、蘭の長濱是なり。(中略)今は國引き訖へぬと詔りたまひて、意宇の杜に御杖衝き立てて、意惠と詔りたまひき。故意宇と云ふ。(出雲風土記、意宇郡)

(此の郡を意宇と名づけるわけは、この國を修理せられた(八東水)臣津野命の仰せられるやうは、「八雲立つ」出雲の國は、(狹布の)若く小さい國である。國の作り始に小さく作られ

た。だから修理しよう」と仰せになつて、「(栲衾) 新羅國の御埼に、國土の餘つてゐる所がありはしないかと見たところ、國土の餘りがある」と仰せになつて、童女の胸のやうに廣い紐をお取りになり、大魚の腮を裂くやうに、その紐で新羅の國土を切り取つて、薄の穂が揺れるやうに、動かして離してしまひ、三重に編んだ丈夫な綱を懸けて、(霜葛) するりするりと手繰り寄せ、(河船の) そろりそろりと、「國來い國來い」と云つて引つばつて來て出雲國に縫ひつけた土地が、古津の地の境目からして、(八穂米) 杵築の御埼にわたるところである。かやうにして、堅く縛り立てた棧は、石見國と出雲國との堺にある三瓶山といふ名の山がこれである。またこれを持つて來るのに引つばつた綱は齒の長濱がこれである……「もうこれで國土の修理が終つた」と仰せになつて、意宇の森に御杖を突き立てて、「うをー、うをー」(ヤレヤレ) と仰せになつた。それでこの土地を意宇と云ふのである。

祝 詞

國體を尊重し、國家精神を純朴な歌や物語で傳へた古代の人々は、又、神祇を信仰し、神々に對

しまつり壯嚴な祭の詞を捧げた。これが祝詞である。特に、天皇が、國民に代つて祝詞を奏せしめ給ふを、大祝詞と申す。祝詞は、神を感動しまつる事が出来るやうに、美しく流麗な表現が用ひられ、内容には、しばしばわが國家の來由や本質に觸れた所がある。此の古代の祝詞は長く口傳へで傳へられたが、平安時代に至り。始めて「延喜式」の中に二十六篇記載せられた。

御年の皇神等の前に白さく、皇神等の依さし奉らむ奥つ御年を、手腕に水沫かき垂り、向股に泥かき寄せて、取作らむ奥つ御年を、八束穂の嚴穂に、皇神等の依さし奉らば、初穂をば千穎八百穎に奉り置きて、穂の上高知り、穂の腹滿て並べて、汁にも穎にも稱辭竟へ奉らむ。大野の原に生ふる物は、甘菜辛菜、青海の原に住む物は、鱒の廣物鱒の狭物、奥つ藻菜邊つ藻菜に至るまでに、御衣は明妙、照妙、和妙、荒妙に、稱へ辭竟へ奉らむ。御年の皇神の前に、白き馬白き猪白き鶏、種種色の物を備へ奉りて、皇御孫命の珍の幣帛を、稱へ辭竟へ奉らくと宣りたまふ。(祈年祭)

(穀物の神々方の前に申上げますやうは、皇祖神がたのお力添になる晚稻を、手の肘に水泡を

垂らして、兩股に泥を搔きつけて耕作する晚稻を、長い穂が立派に實るまでに皇祖神がたが力添なされるならば、お初穂を千穂も八百穂も差上げておいて、酒を甕の縁まで高く入れ、甕の腹に一杯満たせて甕を並べ、汁物にしても穂のまゝでも差上げて讃へ言をつくしませう。野原に生へる物では、甘い菜、辛い菜、海中に住む物では、大きい魚や小さい魚、沖の藻や海邊の藻にいたるまで、又、衣服は、照り輝く美しい絹物や、和い布、荒い布を差上げて、讃へ言をつくしませう。穀物の神々方の前に、白い馬、白い猪、白い鶏、種々の品物をお供へ申上げて、天皇が立派な幣帛を差上げて、讃へ言をおつくしになります、といふことを、天皇が仰せになります。

この文章に溢れてゐる、敬神の情と、わが國の存立が神々の冥助にまつ所多き國體とを知らなければならぬ。

### 宣 命

宣命は 天皇の國民に下し賜はるお言葉で、祝詞と同様の壯重な國語で表現せられてゐる。日本書紀の中にも宣命が出てゐるがそれは全部漢文に譯されたので、純粹の國語の宣命は、日本書紀の續きとして、平安時代に撰ばれた『續日本紀』に、文武天皇から、桓武天皇まで九代の宣命が六十二篇ある。その中に、特に明・淨・直の國民精神を強調あそばされてゐる事を上代精神の發露として、尊く拜するのである。

### 萬 葉 集

記紀歌謡は更に詩としての發達を見て、和歌の形式が完成し、表現も洗煉せられて、世界に誇るに足るすぐれた作品が作り出されるに至つた。これら古代の和歌を集成した一大歌集が『萬葉集』である。

『萬葉集』は大伴家持の撰と云はれ、仁徳天皇時代から淳仁天皇時代まで四百年間の作、約四千五百首を収めてゐる。これらの多數の作品を通じて、まこと・まごゝろの率直な表出が、特に著しいのである。



數多の作家の中、柿本人麿は、最も偉大な歌人で、雄渾な表現を以て、崇高な精神を歌ひ、死を多く取扱つて宗教的な詩情に満ち溢れてゐる。特に長歌にすぐれてゐた。

山部赤人は自然を歌つて清純であり、山上憶良は人間生活に觸れて哲學的瞑想的な趣があり、大伴旅人に至つては明朗快活な作品を残した。又、傳説の歌を多く作つた、集中唯一の敘事歌人である高橋虫麿や、女性としては優しい歌を多數残してゐる大伴坂上郎女がある。これらの人々より一時代遅れて出た大伴家持に至つて、優美な情調が著しくなつた。

就中東國地方から邊境防備に出で立つた防人の歌には、純情を吐露して忠誠の精神に満ちた歌が多い。

これらを通じて、『萬葉集』の精神は、純粹の愛情の表現と、國家精神の昂揚せられてゐる點に特色がある。次に、集中の代表歌若干をあげよう。

吉野宮に幸しませし時柿本朝臣人麿の作める歌

安見ししわが大君、神ながら神さびせずと、吉野川たぎつ河内に、高殿を高知りまして、登り立

ち國見をすれば、たなはる青垣山、山神の奉る御調と、春べは花かざし持ち、秋立てば紅葉挿頭せり、逝き副ふ川の神も、大御食に仕へまつると、上つ瀬に鶉川を立て、下つ瀬に小網さし渡し、山川も依りて仕ふる神の御代かな

反歌

山川も依りて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出せるかも（柿本人麿）

（吉野の離宮に持統天皇の行幸があつた際、柿本人麿の詠んだ長歌。

（安見しし）わが天皇は、神にましますまゝ神わざをなされるとて、吉野川のたぎち流れる河邊に、高い御殿を高くお造りになつて、登り立たれ國の様子を御覽になると、重疊たる青い垣根のやうに並んでゐる山の、山の神の奉る御貢物としては、春には花を頭に差してかざり、秋になると紅葉でかざり立ててお見せする。又、行きめぐる川の神も、御食事にお仕へ申上げようと、上流では鶉を使つて魚をとり、下流は小網をさし渡して魚をとる。かやうに山の神も川の神も力を合せてお仕へ申すのは、まことに神のごとき天皇の御代であることだ。

反復の歌

山の神も川の神も力を合せてお仕へ申上げる神そのまゝの天皇は、たぎち流れる河の中へ船出をあそばされる。

大君は神にしませば天雲の雷の上に鷹いかりせるかも（柿本人麿）

（天皇は神さまでいらせられるから空の雷といふ名の雷岡の上にも御假屋を作つてお泊りなされることだ。）

近江の海夕浪千鳥なが鳴けば心もしぬに古へ思ほゆ（柿本人麿）

（琵琶湖で夕方浪間に鳴く千鳥よ、お前が鳴くと、自分は心もしをれて、昔ここに都のあつた往時が思ひ出されるのだ。）

和歌の浦に潮満ち来れば濁を無なみ蘆邊をさして鶴たづ鳴き渡る（山部赤人）

（和歌の浦に潮が満ちて来ると沖の方は干潟が無くなるので、蘆のある岸邊の方に向つて鶴が

鳴きながら飛んで来る。）

男子おのこやも空しかるべき萬代よろづよに語り繼ぐべき名は立てずして（山上憶良）

（男子が空しく死んで行かれようか。萬年の後までも語り傳へられるやうな名をばあげないで。）

天皇すめらみの御代榮えんと東あづまなるみちのくに金花くがわ咲く（大伴家持）

（天皇の御代が榮えようとして東國の奥州の金華山に黄金が花の咲くやうに産出する。）

今日よりは願ねがひなくて大君おほきみの醜みにの御み楯たてと出で立つ我は（防人、今奉部いままつりべのよそ與會よ布）

（今日よりは後願の憂もなく、天皇の丈夫な守の御楯として自分は防備に出で立つのだ。）

漢詩と説話

天智天皇時代頃から、漢詩を作る事も試みられ、『懷風藻』の中には、弘文天皇（大友皇子）の御製の如く雄大な氣魄の漲ぎります御作を拜す。

皇明光<sup>リ</sup>日月<sup>ム</sup> 帝徳載<sup>ス</sup>天地<sup>ヲ</sup> 三才並<sup>ス</sup>泰昌 萬國表<sup>ス</sup>臣義<sup>ヲ</sup>

（大友皇子 五言、侍<sup>レ</sup>宴<sup>ニ</sup>絶）

（天皇の御威光は日月のごとく光り、天皇の御威徳は天地をも載せる。わが國では天地人の三才が共に榮え、萬國はわが國に臣としての忠義を表はすのである。）

大津皇子の御作もすぐれてゐる。又、佛教も次第に民間に浸潤し、主として佛教に關する古代の説話を集めた書に、『日本靈異記』がある。

## 平安時代文學

### 假名の發達

上代の漢字から導かれてかなが出来上り、次第に國民の間に普及した。これが文學の方に非常な影響を及ぼして、新しい發展を見たのである。

### 漢詩と和歌

併し、平安時代の始は、外國の文化を熱心に吸收消化してゐた時代で、わが國の文學は一時衰へ、ただ漢詩だけが盛んに行はれてゐた。けれども、さういふ外國の文學を取り入れるだけでは、満足が出来ず、やがて再び和歌が勃興して來て、漢詩と和歌にすぐれた菅原道眞が出で、それにつづいて、在原業平・僧正遍照・小野小町等の六歌仙が現れた。

勅撰集

その後、醍醐天皇の延喜五年に、紀貫之等が勅命により、『古今集』を撰して奉つた。これが勅撰集の最初で、これより和歌はいよいよ盛んとなり、平安時代に七つの勅撰集が撰ばれた。

『古今集』の歌風は、音調が流麗で、優美軽快であるとともに表現は平明、且、理性的な面がある。此の傾向は、『古今集』『後撰集』『拾遺集』の三代集の間続いたが、『後拾遺集』から稍變化して、『金葉集』『詞花集』に至り、一層新しい傾向が顯著となり、『千載集』に至つて、所謂幽玄の情緒を貴ぶ新古今風の歌風が明瞭となつた。これは、それぞれの勅撰集の命を下し給うた天皇・院の御意向とともに、撰者の識見によつても影響せられる所が多く、就中、『金葉集』の撰者源俊頼と、『千載集』の撰者藤原俊成がすぐれてゐた。又、俊頼以前では、曾根好忠が、『萬葉集』の影響を受けて、新しい歌風を起した先驅者として注意すべき人である。

此の時代の末には、西行が出て、自然を尊び、諸國を行脚して、純眞な作品を示した。家集を『山家集』と云ふ。

以上のやうに、この時代の和歌の變遷を概観して、ここに『古今集』の序文の初を引く。

大和歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事わざ繁きものなれば、心に思ふ事を見るもの聞くものにつけて云ひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水に棲む蛙かはづの聲をきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。

(和歌は人の心を基として、さまざまの言葉に現れ出たものである。世の中に居る人は、いろいろな事があるから、心に浮ぶ事を、見るもの聞くものにつけて、うたひ出したのである。花に啼く鶯や、水に棲む蛙の聲をきくと、あらゆる生き物は、いかなるものでも歌を詠まないものがあらうか。まして人間においてはなほ更の事である。)

自然と親しみ、詩精神を基調とする、わが國の文學觀の本質が、よく現れてゐる。更に、當代の代表的な作例の二三を示すなら、

櫻散る木の下風は寒むからで空に知られぬ雪ぞ散りける（貫之）

（櫻を散らす木の下風の風は寒くなくて、空には見ることに出来ない花の吹雪が散つてゐる。）

鳴けや鳴けよもぎが杣の垂暮れゆく秋はげにぞ悲しき（好忠）

（蓬の茂みに鳴く蚕よ、もつと鳴いてくれ。暮れゆく秋は實際、誰もさびしいのだから。）

木枯の雲吹き拂ふ高根よりさえても月の澄みのぼるかな（俊頼）

（木枯の風が雲を吹き拂つた高い山の嶺から冴えきつた月の光が澄みわたつて差し上ることだ。）

何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる（西行）

（伊勢大神宮の神殿のうちにはどのやうでおいであそばすかは知らないが、もつたいなさに涙がこぼれる。）

歌 謠

口で歌はれる歌謠としては、此の時代の初に神樂・催馬樂があり、後半期には朗詠が行はれ、末に至つて、雜藝・今様が現れたが、此の雜藝の歌謠を集録あそばされた書に、後白河上皇御撰の『梁塵秘抄』がある。このやうな方面に御留意あそばされて、民間の精神を顧みさせられたことは尊く。

これらの歌謠には純真で素朴な歌が多く、よく民間の美しい心を表現してゐる。形式は不定であるが、次第に、その中から七五調が発達し、此の時代の末になつて、七五・四句から成る今様形式が出来上つた。次に、それらの歌の中の美しい歌、無邪氣なものを二三首出すが、歌の譯は、これからはつけないで省略する。

銀の目貫の太刀を下げ佩きて奈良の都を練るは誰が子ぞ（神樂歌・劍）

伊勢の海の清き渚に潮間に名告藻や摘まん貝や拾はん玉や拾はん（催馬樂・伊勢海）

遊びをせんとや生れけん、戯れせんとや生れけん、遊ぶ子どもの聲聞けば、わが身さへこそ揺がるれ（梁塵秘抄・四句神歌）

舞へく／＼蝸牛、舞はぬものならば、馬の子や牛の子に蹴させてん、踏割らせてん、まことに美しく舞うたらば、花の園まで遊ばせん（同）

終の二首のごときは、無邪氣な童謡で、現代の蝸牛の歌の始も、ここに見ることが出来る。

### 朗詠

朗詠は、和歌をも歌つたが、多くは、漢詩の二句を朗詠したもので、邦人唐人のすぐれた作が好んで愛誦された。それらの和歌や詩句を集めた書が、藤原公任撰の『和漢朗詠集』及びその續篇な

る藤原基俊撰の『新撰朗詠集』である。これらは今日の朗吟の源とも見られて、後代のごとく勇壯悲絶な作がなく、多くは優雅な花鳥風月の題材であるのは、時代の風潮であるが、漢詩の國詩化の傾向は、これにより一層強くなつた。

池冷 水無三伏夏、松高 風有一聲秋、（夏日閑避暑、源英明）

（池冷しくはしては水に三伏の夏なし。松高くしては風に一聲の秋あり。）

### 女子の文學

以上は詩歌に關する文學であるが、散文文學について述べるにあたり、一言觸れておかなければならぬことは、この時代の文字についてである。

かなが普及しても、漢字は、やはり學問のある人々の間に行はれ、かなは、主に女子の使用する文字となつた。それで、此の時代の國語の作品は、主として女性により、傑作が作り出されたので

ある。それとともに、女性的な優美典雅の趣が、すべての作品を蔽ふ特色となつてゐる。

歌 物 語

併し、最初はやはり男子によつてかなの文學が作られ世に弘められた。さうして、まだかなを用いて十分に文章を書きこなす事に馴れてゐなかつたので、和歌を主として、その説明として、短い文章が加へられる程度にとどまつてゐた。

かういふ歌を主とした短い物語を幾つも集めて一冊とした作品を、歌物語と云ふ。歌物語には、在原業平の一代の話を中心としてゐる『伊勢物語』と、それに遅れて、種々の傳説なども收めてゐる『大和物語』が出た。

昔男ありけり。身は賤しながら、母なん皇女なりける。その母長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕へしければ、参づとしけれど、しばしばえ参でず、獨り子にさへありければ、いと愛しうし給ひけり。さるほどに十二月ばかりに、とみの事とて御文あり。驚きて見れば、異事はな

くて、

老いぬればさらぬ別のありと云へばいよいよ見まくほしき君かな

となんありける。これを見て、馬にも乗りあへず参るとて、いといたう打泣きて、道すがら思ひける。

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと祈る人の子のため

(昔一人の男がゐた。地位は低かつたが、母は皇女であつた。その母は長岡といふ所にお住みになつてゐた。子は都で宮中にお仕へしてゐたから、母を訪れようとしたけれど、度々は参ることが出来ない。一人息子でさへあつたから、まことに可愛く思つて居られるのであつた。さうかうしてゐる間に十二月頃に、急の用事と云つてお手紙が來た。驚いて手紙を見ると、他の事は何も書いてなく

老いぬればさらぬ別のありと云へばいよいよ見まくほしき君かな

年を取ると人生に避けられぬ死別があるといふから、ますますあなたを見たく思ふことです

とだけ書いてあつた。これを見て、馬にもよう乗らないやうな有様で長岡に参らうとして、本當に烈しく泣いて、途中でも、このやうに思ふのであつた。

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと祈る人の子のため

世の中に死別などといふものがなければよいのに。千年も生きて居られるやうにと祈る子どもたちのために。

これは『伊勢物語』の一節であるが、主人公である男の熱情と一途な心とが、この親子の愛情の間にも切々として現されてゐる。業平は、さういふ人物であつた。それゆゑ、その歌は、意あまつて詞が足りないといふと評されてゐる。

### 物語文學

やがて、かやうな短い物語だけでは飽き足らず、長篇の物語が現れ、始は童話的な、空想に富んだ作品であつたのが、次第に現實的な世界を取扱ふ作品に發達して行つた。

『竹取物語』は、さういふ長篇の物語の最初の作品で、竹の中から現れたかぐや姫が天に上るまでの、童話的な色彩に富んだ物語である。次に引くのは、竹取物語の書出しのところである。

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山に交りて、竹を取りつつ、萬づの事に使ひけり。名をば讚岐造麿さぬきのみやつことなん云ひける。その竹の中にも、本光る竹一筋ありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いと美しうて居たり。翁云ふやう、「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ、子になり給ふべき人なめり」とて、手に打入れて家に持て來ぬ。

(昔々、竹取の翁といふ者があつた。野や山に入つて、竹を切つてはいろいろな事に使つてゐた。名を讚岐造麿と云つた。その竹の中に、根もとの光る竹が一本あつた。不思議に思つて近寄つて見ると、幹の中が光つてゐた。それを見ると、三寸ぐらゐの人が大へん美しく入つてゐた。翁が云ふやうは、「わしが毎朝毎夕見る竹の中においでになるのによつて、よくわしにはわかる、わしの子どもにおなりなされる人なのだらう」と云つて、手に握つて家に持つて歸つ



た。

かういふ質實な文章で、空想的な物語が進められ、すこぶる明朗快活で、かつ滑稽の趣に富んでゐる。

これについて非常に長い『宇津保物語』が現れ、それと殆ど時を同じくして、繼子苛めの話を主題とする『落窪物語』が出て、遂に一條天皇時代に至り、わが國の文學の中でも、最大傑作と云はれる、『源氏物語』が紫式部によつて創作せられたのである。

『源氏物語』は五十四帖から成り、後半を宇治十帖と云ひ、前半は、光源氏君の人間的な苦惱の多い生涯を描いて、そこに當時の宮廷生活が繪巻物の如く美しく寫し出され、物のあはれの情趣を漂はせてゐるのである。

日もいと永きに、つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れて、その小柴垣のもとに立ち出で給ふ。人々は歸し給ひて、惟光ばかり御供して、のぞき給へば、ただ此の西面にしも、持佛据ゑ

率りて、行ふ尼なりけり。簾垂少し上げて、花奉るめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に經を置きて、いと惱ましげに讀みぬたる尼君、直人と見えす。四十餘りばかりにて、いと白く貴に瘦せられたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪かみの美しげにそがれたる末も、なかなか長きよりも、こよなう今めかしきものかなと、哀れげに見給ふ。清げなる大人二人ばかり、さては童わらわぞ出で入り遊ぶなかに、十ばかりにやあらんと見えて、白き衣山吹などのなれたる着て、走り來たる女子をんな、あまた見えつる子供に似るべくもあらず、いみじう生なまひ先見えて、美しげなるかたちなり。髪は扇をひろげたるやうにゆらくとして、顔はいと赤く磨りなして立てり。「何事ぞや、童わらわと腹立ち給へるか」とて、尼君の見上げたるに、少し覺えたる所あれば、子なめりと見給ふ。「雀の子を犬君が逃しつる。伏籠ふせこの中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。此の居たる大人、「例の心なしの、かゝるわざをして、苛こまるゝこそいと心づきなけれ。いづ方へか罷りぬる。いとをかしうやうく馴れつるものを。烏などもこそ見つけくれ」とて、立ちて行く。髪ゆるらかに、いと長く、目安き人なめり。少納言の乳母めのととぞ人云ふめるは、此の子の後見うしろみなるべし。尼君、「いであな幼こや。云ふかひなう物し給ふかな。おのがかく今日明日あすになりぬる命をば、

何とも思おぼしたらずで、雀慕つばねひ給ふほどよ。罪得る事ぞと常に聞ゆるを、心憂こころく」とて、「此方こゝや」と言へば、突居つひたり。つらつきいとらうたげにて、眉のわたり打ちけぶり、いはけなく搔遣かいたりたる額ひたひつき髪かみさし、いみじう美し。

(日も大へん長くて、退屈なので、夕方のひどく霞がかかつてゐるのにまぎれて、源氏は、かの小さい柴垣のある庵のところにお出かけになる。人々はお歸しになつて、惟光だけをお供につれて、おのぞきになると、直ぐその西側の座敷に、持佛を安置して、經をよんでゐる尾がゐた。簾垂を少し巻き上げて、花を供へるやうである。真中の柱に寄りかかつて、脇息の上にお經を置いて、まことに苦しさうな様子で讀經をしてゐる尼君は、身分の低い人とは見えな。四十餘りぐらゐで、まことに色白く上品にほつそりと痩せてゐるが、顔つきはふつくらとして、眼のあたり、髪かみの美しく切り揃へてある毛先も、却つて長いより、この上もなく近代的な感じがすることだと、興味ふかく御覽になる。小ぎれいな年増の女房が二人ほど、或は少女が座敷を出たり入つたりして遊ぶ中に、十ぐらゐであらうかと見えて、白い着物や山吹やまぶ襲せの上着などの糊ぬりの落ちたのを着て、走つて來た女の子は、多勢見えた他の子どもとは比較にもな

らないくらゐ、本たうに年頃ねがらのことが今から想像せられるほどの美しい顔かたちであつた。髪は扇のやうに末廣しんがりに廣がつて、ゆらゆらとゆらめき、顔をひどく眞つ赤にこすり立てて泣きながら立つてゐる。「どうしたの。子どもと喧嘩けんかをしなすつたのか」と云つて、尼君の見上げたのに、少し似た所があるので、尼君の子であらうと御覽になる。「雀の雛ひなを犬いぬ君くんが逃してしまひました。香の籠の中に入れておいたのに」と云つて、大へん残念に思つてゐる。そこに座つてゐた年増の女房が、「あの氣のきかない子が、またこんな事をしでかして、叱られるといふのは、本たうに氣にくはない。雀はどこへ行つてしまつたのでせう。せつかくかわいらしく段々と馴れて來たのに。烏などが見つけるでせうに。」と云つて、立つて行く。髪がふさやかで、大へん長く、見苦しくない人のやうである。少納言の乳母と人が云ふやうであるから、この子の乳母なのであらう。尼君は、「まあ何といふ子供らしいこと。がんぜなくておいでになることだ。わたしがこのやうに今日明日も知れぬほどになつた命なのに、何ともお思ひにならないで、わたしより雀を戀こひしがつておいでになる工合は。生き物を飼ふのは罪の深い事といつても申上げるのに、云ふことをきかないで情ない人」と云つて、「ここへいらつしやい」と

云ふと、膝をついて座つた。顔つきは大へん可愛らしい様子で、眉の邊は生毛うぶげでぼうとして、無邪氣に毛を掻きつけた生へ際や髪の毛筋は、ひどく美しい。

これは、『源氏物語』の若紫の巻の一節で、この物語の女主人公である紫上の、少女時代の無邪氣な有様が、巧みに描寫せられてゐる。わが國民の持つ美しい心、まごころに富んだ理想が、この物語の中にはありありと寫し出されてゐるのである。この世界で有数の傑作が、あらゆる諸外國が文學の上ではまだ暗黒時代で、近代的な精神の作品を生じるにいたらなかつたとき、世界に先んじて、この誇るべき業績を出だしてゐることは、詩歌の方面の萬葉集と並んで、わが國の代表的な古典といふべきである。

『源氏物語』以外にも、長篇小説に『狭衣物語』等、數多くの作品が續々と出で、又、短篇小説を集めたものに、『堤中納言物語』の如き、すぐれた作品も現れたが、多くは『源氏物語』を模倣して、甚だ不自然な内容とした、頽廢的な傾向の物語である。

## 歴史文學

一方、此の時代の黄金時代ともいふべき一條天皇時代を主として、過去の歴史を回顧した歴史物語が現れ、女性的な『榮華物語』と、男性的な『大鏡』とが、その代表作である。特に『大鏡』には歴史的な批判が加へられてゐて、描寫にも人生の眞實相を感じさせるものがあり、平安時代の上層社會の赤裸々な生活を知るのには、最も適當な作品である。高齡の老人の思ひ出話で歴史が物語られるといふ形式にも獨創的なものがあつて、後、本書を模倣した作品も數々出で、大鏡、水鏡、今鏡、増鏡の四書を特に四鏡と稱してゐる。

(中納言藤原隆家) 御目の損そとはれ給ひしこそ、いとくあたらしかりしか。萬づにつくろはせ給ひしかども、えやませ給はで、御交らひ絶え給へる頃、大貳の闕出くわしでで來て、人々望みのしりに、唐人からびとの目つくるふがあるに見せんとおぼ思ひして、試みにならばやと申し給ひければ、三條院の御時にて、又いとほしくもや思召しけん、一言ひとこととなくならせ給ひてしぞかし。(中略) 政まつらよくし給

ふとて、筑紫の人さながら従ひ申したりけり。例の大貳十年がほどにて、上り給へりところ申ししか。かの國におはしまししほど、刀伊の國の者、にはかに此の國を討ち取らんとや思ひけん、越え來りけるに、筑紫には、かねての用意もなくて、大貳殿弓矢の本末をも知り給はねば、いかがと思しけれど、大和心畏くおはする人にて、筑後肥前肥後九國の人を起させ給ふをばさるものにて、府の内に仕うまつる人をさへ押し取りて、戦はしめ給ひければ、かやつが方の者ども多く死にけるは、さは云へど家高くおはします故に、いみじかりし事平げ給へりし殿ぞかし。公、大臣大納言にもなさせ給ひぬべかりしかど、御交らひ絶えにければ、たゞにはおはするにこそあめれ。此の中に宗と射返したる者ども記して、公に奏せられたりしかば、皆賞せさせ給ひにき。種材は壹岐守になされ、その子は太宰監にこそはなさせ給へりしか。此の種材が族は、純友討ちたりし者の筋なり。

（藤原隆家が眼病をお患ひになつたのは、本たうにお氣の毒なことであつた。いろいろと手あてをなされたが、恢復なさらぬで、世間に類出しもなさらぬやうになつた頃、九州の太宰大貳が闕員となつたので、人々がその役目にならうと望んで運動をしたが、隆家は、支那人の

眼醫者が九州に來てゐるのに見てもらはうとお思ひになり、試みに「大貳になりたい」と仰せになつたところ、三條天皇の御代で、それに又不憚にお思ひあそばしたのであらうか、二言と云ふことなく直ちに大貳におなりになつたのであつた。……九州では政治向きをよくなされること云つて、九州の人々はみんな心服いたしてゐた。大貳の任期は十年が例なので、任期が満ちて上京なされたといふ話であつた。この九州においでになつた時、女眞族が、急にわが國を討ち取らうと思つたのであらうか、海を越えて征めて來たのに、九州では、前もつて準備もしてゐないので、隆家は弓矢の本と先も御存じにならない方だから、この戦はどうであらうかと危くお思ひになつたが、大和魂のすぐれて居られる方で、筑後肥前肥後九國の人を召集せられた事は云ふまでもなく、太宰府内に勤務してゐる人までも徴募して戦はせなされたから、敵の奴らが多勢戦死したのは、何と云つても、家がらが尊くて居られるので、重大な事件を無事に平定しておしまひになつた方なのである。朝廷では、勳功により大臣又は大納言にでもなされさうなものであるが、人と行き來をなさらぬで居られるので、そのまゝでおかれたのであらう。従軍の人々の中でもおもに弓を射て敵を退却させた殊勳者を記録して、朝廷に報告申上げ

たので、皆褒美をいただいた。種材は壹岐守にせられ、その子は太宰府の監になされたのであつた。この種材の一族は、純友の亂を討ち平げた者の血筋をひく。——なほ、この藤原隆家が、九州の勤皇家である菊池氏の祖先となつてゐる。）

これは、内大臣道隆の條から、その子の隆家に關する一節を引いたもの、この剛直な人物の性格は平安時代の公卿としては異數に屬するが、そこに現れてゐる國防の精神はわが國民の血に流れてゐる上古の防人以來の勤皇愛國の精神である。平安時代でも、やはりこの點の魂は上古と變るものではなかつた。大和心といふ言葉も注意してよい。（なほ、大和魂といふ言葉は、『源氏物語』に見えてゐるのが一番古い。源氏物語の日本的性格参照。）

### 説話 文學

又、此の時代の後半期には、日本・支那・印度の佛教に關する傳説、その他世俗の巷説をも多く集めた『今昔物語集』が出てゐて、その中には、朴訥で質實な民間精神に富んだ物語が多く、女の

力持の話など、上流公卿社會の話とは違つて、甚だ面白い。平安時代でも、わが國民生活の全體から見ると、優美柔弱なことばかりでなく、むしろ、このやうに勇健な面の多かつたことを見忘れてはならない。だから刀伊の寇も撃退することが出来たのである。

### 日記 文學

國語で文學的な表現をした日記文學も數々現れてゐるが、これも主として女子の作品である。ただ最初の『土佐日記』だけは紀貫之の作であるが、これも女が書いたといふ體裁になつてゐる。この日記は、貫之が土佐から都に歸るまでの旅行記で、土佐で死んだ愛子に對する悲しみの情が、文章の間に隠現してゐる。それ以後、右大將道綱母の『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』『紫式部日記』又遅れて菅原孝標女たかすゑのむすめの『更級日記』等があり、自分の過去の追憶や内面外面の生活を深い感慨をこめて書いたものである。

十九日、日悪しければ、船出ださず。

二十日、昨日のやうなれば船も出さず、皆人々憂へ歎く。苦しく心もとなければ、ただ日の経ぬる數を、今日幾日、二十日三十日と數ふれば、指もそこなはれぬべし。夜もいも寝ず、いとわびし。二十日の夜の月出でにけり。山の端もなくて、海の中よりぞ出で来る。かうやうなるを見てや、昔安倍の仲麻呂と云ひける人は、唐土に渡りて、歸り來たる時に、船に乗るべき所にて、かの國人、馬の餞し、別惜しみて、かしの詩作りなどしける。飽かずやありけん、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は、海よりぞ出でける。これを見て、仲麻呂の主、わが國には、かゝる歌なん、神代より神も詠みたび、今は上中下の人も、かうやうに別惜しみ、喜びもあり悲しみもある時には詠むとて、詠めりける歌、

青海原振りさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

とぞ詠めりける。かの國の人、聞き知るまじく覺えたれど、言の意を、男文字に、様を書き出だして、こゝの言葉傳へたる人に云ひ知らせければ、意をや聞き得たりけん、いと思の外になん愛でける。唐土と此の國とは、言葉異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じ事にやあらん。さて今、そのかみを思ひやりて、ある人の詠める、

都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

(承平五年正月十九日、今日は日が悪いので船を出さない。

正月二十日、昨日と同様であるから船を出さない。人々は皆心配して歎いてゐる。氣の毒で心が、りであるから、たゞ日數のたつたのを、今日は幾日になるか、二十日、三十日と數へてゆくと、指も痛くなるほどであらう。夜もろくろく眠らず、實に困つた。夜、二十日の月が出た。月は大てい山の端から出るものだが、山の端とてはないので、海の中から出て来る。このやうな眺を見て、昔安倍仲麻呂と云つた人が、支那に渡つて、歸朝しようとした時に、船に乗る湊で、かの國の人が餞別をして、別を惜しみ、漢詩を作つたりなどしたが、まだ飽き足らなかつたのであらうか、二十日の夜の月が出るまで續けてゐた。その月は、海から出たのであつた。これを見て、仲麻呂は、「わが國では、かやうな歌といふものがあつて、神代から神もお詠みになり、今では上流社會から下層社會まで、このやうに別を惜しんだり、喜びや悲しみのある時に詠んでゐる」と云つて、詠んだ歌は、

青海原振りさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

海上を仰いで眺めて見ると、この異郷の空で見る月も、春日の三笠山に出た月と同じ眺めである。

と詠んだのであつた。かの國の人は、意味がわかるまいと思はれたが、歌の意味を漢文で、大略書き現して、わが國の言葉を知つてゐる人に云うてきかせたところ、意味が諒解出来たのであらうか、意外にも非常に感心した。支那とわが國とは、言葉は違つてゐるが、月の光は同じことであらうから、人の心もやはり同じであらう。さて今、その當時の事を想像して、ある人が、このやうに詠んだ。

都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

都では山の頂に見た月であるが、今は波から出て波間に入ることだ。

これは『土佐日記』の一節、阿部仲麿に關するところを主として出した。長い事、風向が悪く船が出発しない事を歎いてゐる。貫之は土佐から京都に歸るまで、まる二ヶ月を費したのである。

野山蘆荻の中を分くるより、他の事はなくて、武藏と相模との中にありて、あすだ川といふは、在五中將の、いざ言問はんと詠みける渡なり。中將の集には、隅田川とあり。船にて渡りぬれば、相模の國になりぬ。にしとみと云ふ所の山、繪能く書きたらん屏風を、立て並べたらんやうなり。片つ方は海、濱のさまも、寄せ返る浪の氣色も、いみじう面白し。唐が原といふ所も砂子のいみじう白きを、二三日行く。夏は倭器麥の、濃く薄く、錦を引けるやうになん咲きたる。これは、秋の末なれば、見えぬといふに、なほ所々は、打ちこぼれつつ、忘れげに咲き渡れり。唐が原に、倭器麥の咲きけんこそなど、人々をかしがる。

(寛仁四年九月下旬。野や山、蘆や荻の間を分けて來るより他の事はなくて、武藏と相模との間にある、あすだ川といふのは、在原業平が、

名にし負はばいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと

都鳥と名を持つてゐるからには都の事を尋ねよう。都に残して來た私の愛人は無事で居るかどうかと。

と詠んだ渡場であつた。業平集には隅田川とある。船で渡つてしまふと相模の國になつた。に





（雪が大へん深く降り積つたのに、いつもとは違つて、格子戸をおしめさせになり、圍爐裏に火をおこして雑談をして女房たちが集り伺候してゐると、中宮は「少納言や。香爐峯の雪はどろだつたらうかね」と仰せになつたから、直ちに格子戸を釣り上げさせ、御簾を高く巻き上げるといふと、お笑ひなされる。（これは白樂天の詩に「香爐峯の雪は簾を撥けて看る」とあるのによつたもの）。女房たちも皆、さういふ事は知つてをり、朗詠などにさへうたふのだが、ふとは思ひつかなかつたのである。女房たちは、「やはり、この中宮さまの女房たちの中では、清少納言が代表的な人物のやうですね」と云ふ。）

かやうにして、この時代の女性は、假名文字を縦横に驅馳して、かつて見ない流暢でのびのびとした筆致を示し、獨特の文章によつて、その精神を發揮することが出来た。物語、日記、隨筆等、今までの文學には存在しない、新しい種類を文學の世界に加へて、その内容を豊富にし、古典文學としての一時期を劃してゐるのである。その意味では、當代はまさに前後に比類のない女性文學の時代であつた。これはわが國の婦人の能力が世界においてもすぐれたもののあることを、最も明白に實證してゐるのである。（この項については、後の平安文學史概説をも参照せられたい。）

## 鎌倉時代文學

### 鎌倉文學の特色

今までの、宮廷貴族が文化を支配してゐた時代から、武士が擡頭して文化的方面にも種々の影響を與へる時代になると、文學の特色も甚だ變つて來た。文章も從來の和文調の柔軟な表現が、漢語調の多く入つてゐる雄勁な表現に變り、内容にも道義的な武士生活や男性的な闘争が取扱はれるやうになつた。併し、一面において、從來の貴族的な文學の系統も長く行はれてゐたのである。

### 戦記文學

新しく起つた文學としては、先づ戦記物（軍記物とも云ふ）がある。「平家物語」はその代表作で、源平興亡の悲劇を描いて、佛教的な無常觀を基調とし、或は悲痛哀切、或は勇壯絢爛な物語を

展開した。『源平盛衰記』は『平家物語』が敷衍増補せられて長大となつた作品である。その他、『保元物語』や『平治物語』がある。

これらの作品は口誦文學の性質を有し、『平家物語』の如きは琵琶に合せて語られたものである。これを平曲（或は平家琵琶）と云つてゐる。

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず、ただ春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。遠く異朝を訪ふに、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、これらは皆舊主先王の政にも従はず、樂しみを極め、諫めをも思ひ入れず、天下の亂れん事をも悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡びにし者どもなり。

（印度の寺院の祇園精舎でつく鐘の聲は、すべての人間の行爲は、はかないものだといふことを響かせて知らせる。印度にある沙羅雙樹の木の花の色は、榮える者も必ず衰へるといふ道理を示してゐる。威張つてゐる者も久しくは續かず、さながら短い春の夜の夢のやうに儚ない。

勇猛な人でも、いつかは死に失せること、全く風に吹かれる塵に同じである。遠く支那の歴史を考へて見るに、秦の趙高と云ひ、漢の王莽と云ひ、梁の周伊（朱异の談）と云ひ、唐の安祿山と云ひ、これらの人は皆舊主人や先の王の政治にも服従しないで、反亂を計つたりしたが、享樂を極めて、人の諫めをも深く心にとめず、國家の亂れる事も考へないで、國民の困る事についても知る所がなかつたから、榮華を久しく保つことが出来ずに亡んでしまつた人々である。）

これは『平家物語』の冒頭であるが、口調のよい章句が、興隆と滅亡の衰史を語り出だして、雄大な構想の中に、明朗な、或は優美な、わが國民精神のおのづからなる現れが、さまざまの事件に織り込まれてゐるところは、一大叙事詩であるとともに、上古の文學以來、始めて見る國民文學的作品であるといふことが出来る。勿論作者は不明で、國民の間に、一大轉機の歴史をめぐつて自然と語り出されたもの、眞實の國民文學とは、かくの如きものであり、その情調においても、まさに代表的古典である。

連歌

連歌も、此の時代に始めて現れたもので、これは和歌から發達して、上句の五七五と下句の七七とを別々の人が作り、やがて、此の兩句を連続して、數人で交互に作り加へて行く長い連歌が行はれるやうになつた。短連歌は、早く萬葉集にも出で、平安時代にも行はれたが、長連歌は、此の時代となつて發達したものである。數人集つて共同して長く作り続ける中に、情調・雰圍氣の變化と統一とを計る所は、獨特の趣致があつて、わが國にのみ見られる共同融和の精神を發揮した藝術創作の態度と云つてよからう。連歌の詩歌としての價値は、この國民的特色にある。二條良基の撰んだ『菟玖波集』は、連歌の最初の撰集で、勅撰集に擬せられてゐる。

吳竹の緑かはらぬ色ながら

御宇多院御製

仕ふる事を松にならべん

前太納言經繼

千年へん鶴の心にかなふやと

前中納言有忠

(菟玖波集卷十八)

説話文學

又、平安時代の『今昔物語集』の系統を引く民間の傳承に基づく説話文學も、此の時代には大いに發達し、むしろ、當時の特色ある文學としてよろしく、『宇治拾遺物語』『十訓抄』『古今著聞集』等の書が出た。その中には、「鬼に癩取らるる事」「雀報恩事」の如く、後世の童話の源となつたものもある。

これも今は昔、田舎の兒の比叡の山へのぼりたりけるが、櫻のめでたく咲きたりけるに、風の烈しく吹きけるを見て、此の兒さめざめと泣きけるを見て、僧のやはら寄りて、「などかうは泣かせ給ふぞ。此の花の散るを惜しう覚えさせ給ふか。櫻ははかなきものにて、かくほどなく移ろひ候なり。されども、さのみぞ候」と慰めければ、「櫻の散らんは、あながちにいかゞせん、苦しからず。わが父の作りたる麥の花散りて、實のいらざらん思ふが、佗びしき」と云ひて、さくりあげてよゝと泣きけるは、うたてしやな。

(これも今からは昔の話。田舎のお稚兒が比叡山に登つたことがあつたが、櫻が立派に咲いてゐたのに、風が烈しく吹いたのを見て、この稚兒がさめざめと泣いてゐるのを見て、一人の僧がそつと傍に寄つて、「どうしてかう泣いて居られるのか。この花の散るのを惜しくお思ひになりますか。櫻は命の短いもので、このやうに、咲いて間もなく散るのです。けれども、物ごとは皆そんなものですよ。」と云つて慰めると、稚兒は、「櫻の散るのは、何と云つてもし方のないことなので、苦しくも何とも思ひません。わたしのお父様の作つてゐた麥の花が風に散らされて、實のらないことを思ふと、悲しいのです」と云つて、しゃくり上げてわつと泣いたのは、呆れたことだ。)

これは『宇治拾遺物語』の中の一話であるが、ひなびた滑稽の中に、地方的、又民衆的な特色がよく出てゐて、當時の農民の生活が思ひやられ、都會と地方との差が、當時も既にあつた事を知り得る。かうした古典の一つの流が筋を引いてゐることを見のがしてはならない。

和歌

平安時代文學の系統を引くものでは、先づ和歌がある。和歌は、此の時代の初に、後鳥羽天皇の御歌を好ませられ、その御命によつて、藤原定家や藤原家隆等が『新古今集』を撰び、新しく、繊細微妙な官能的傾向とともに、一方、壯大な情感をも盛つた、新古今風と言はれる歌風を完成した。此の時代では、鎌倉幕府三代の將軍、源實朝が、最も傑出した歌人で、新古今風の作品もあるが、むしろ自然に萬葉調に悟入して、格調の高い、眞實の溢れた和歌を詠んだ。忠君の至誠を述べ、又、子供や動物に暖い愛情を注いだ作がある。その家集を『金槐和歌集』と云ふ。

山は裂け海はあせなむ世なりとも君に一心わがあらめやも  
いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母を尋ぬる  
大海の磯もとどろに寄る波の割れて碎けて裂けて散るかも  
(これが實朝の作で、その強い格調を味つて頂きたい。)

この當時、俊成の子なる定家によつて、和歌の師範家が立てられ、定家の子孫が、歌道を繼承する事となつた。併し、そのため、作品は平凡となり、歌道の沈滞する原因を作つた。その間、定家の曾孫に當る京極爲兼の如きすぐれた歌人が出て、印象鮮明な、清新の感じのする作品を詠んでゐる。その撰した『玉葉集』は、花園上皇御撰の『風雅集』と並んで、この時代の勅撰集の中でも、すぐれた内容を持つものである。

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

(定家)

大空に普くおほふ雲の心國土うるほふ雨くだすなり

(爲兼)

併し、この時代は初頭の實朝以後、概して和歌は低調であつたが、歴代の御製を拜誦するとき、國風衰へず、歌道の眞の道が、尊きあたりにおいて常に發揮せさせ給ふ尊さを深く感ぜずには居られない。

敷島ややまと島根の朝霞もろこしまでも春は立つらし

(後嵯峨天皇御製。續後撰集)

世のために身をば惜しまぬ心とも荒ぶる神は照らし見るらん

(龜山天皇御製。弘安御百首)

神風に亂れし塵もをさまりぬ天照す日のあきらけき世は

(花園天皇御製。風雅集)

龜山天皇の御製は弘安の役、元寇の時の重大時局における御製として、恐懼感銘の情に堪へないのである。

多数の勅撰集が出でた他、『小倉百人一首』の撰定もこの時代と思はれ、それは和歌の歴史的な配列による具體性と、撰歌が日本の情趣を湛へてゐる點で、國民の間に文學的教養を弘め、まさに國民文學的意義と價值とを持つ古典となつてゐるのは、貫之の六歌仙撰定、公任の三十六歌仙撰定以後における、この時代でも特筆すべき業績であらう。但し、その作家は上古以來、鎌倉時代の初頭にまたがつてゐる。

物語文學

平安時代の物語の系統を引くものも、『佳吉物語』や『苔の衣』をはじめ、數多作り出されたが、特にすぐれたものもない。

### 日記紀行文學

日記紀行や隨筆は、やはり、平安時代の文學の系統を受けてゐるが、併し、その文章や表現は、著しく漢文調の濃厚な鎌倉時代の特色を持つものとなつてゐる。

阿佛尼の『十六夜日記』は、その中、最もすぐれた作品で、わが子のために、幕府に訴訟して、京都から鎌倉に旅行した道中やその前後の事を記した日記である。

二十日、尾張の國、下戸おろどといふ驛うまやに行く。よきぬ道なれば、熱田の宮へ参りて、硯取出でて、書付けて奉る歌、

雨風も神の心に任すらんわが行く先の障さばりあらずな

(建治三年十月二十日。尾張の國、下戸といふ驛を通過する。通り道に當つてゐるので、熱田

神宮へ参詣して、硯を取り出して、書きつけて奉納した歌は、

雨風も神の心に任すらんわが行く先の障さばりあらずな

雨風も神様のお心のまゝでせう。どうぞ私のこれからの道中も故障のごさいませんやうに。

この訴訟の結果を見ないうちに、阿佛尼は鎌倉で死んだ。併し、判決は阿佛尼の方の勝となつてゐる。

此の他、源光行の著と云はれる『海道記』や、光行の子親行の著と云はれる『東關紀行』などがあり、いづれも、『十六夜日記』と同じく、京都から鎌倉へ下つた時の旅行記である。鎌倉幕府が出来た結果、京都・鎌倉間の往來が頻繁となつたので、かういふ作品が相次いで現れたのである。

### 隨筆文學

隨筆には、鴨長明の『方丈記』があつて、此の書は、初に、當時起つた種々の天變地異の凄慘な

描寫をした後、世の無常を厭ひ日野山の庵室に閑居して、平靜な生活を楽しむ事を記してゐる。

行く川の流は絶えずして、しかもその水にあらず、淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまる事なし。世の中にある人と住所<sup>すまか</sup>と、またかくの如し。

(流れ行く川の水は絶えずにあるが、しかもそれは前の水ではない。淀みに浮ぶ水の泡は、或は消え或は出来るが、長い時間そのままとどまつてゐる事はない。世の中に生きてゐる人間も、又その住家も、これと同じことである。)

この冒頭の文句は、特に名高い。時代の變轉が、このやうな一種の隠士といふものを生じ、わが國の文人の一つの生活の在り方を示すこととなつた。

## 室町時代文學

### 室町文學の特色

室町時代は平民文化の擡頭した時代で、文學作品にも、平民を取扱つたものが出てゐる。それとともに、大名の文化も爛熟して、絢爛豪放の趣を呈し、文學にも、その影響が認められる。かくて、鎌倉時代の文學を受けて、次の徳川時代の文學を起す橋渡しの役目をつとめるとともに、その間、独自の文學をも發展させてゐるのである。

### 謠 曲

此の時代に發達し完成した文學の形態として、重要な意義を持つものに謠曲及び狂言がある。これらによつて、從來のわが國の文學が所有しなかつた戯曲といふ新しい文學の形態を、此所に始め

て加へる事が出来た。

謡曲及び狂言は、もと能樂と言はれた卑俗な藝能から發達して來たもので、室町時代の初に、觀阿彌清次によつて、從來の野卑な技藝が改革され、その子世阿彌元清によつて、藝術的價値の高い藝能に完成せられたのである。世阿彌は、自分で多數の詞章を作り、これを作曲し、又、所作を附け、自分で舞臺の上にこれを演じて見せた。綜合藝術家として不世出の天才で、謡曲のすぐれた作品は多く世阿彌の作にかゝるものである。和漢の故事や章句を巧みに消化して、情趣の豊かな表現の中に、幽玄な内容の湛へられてゐる所、絢爛にして且深奥な趣がある。題材は源平時代の武士や、平安時代の古典が多く取り扱はれてゐる他、人買の横行した當代の世相をも取り入れた作品がある。

シテ「とても和國のわこく 甌おと、和歌を詠じて舞歌の曲、そのいろ／＼を顯はさん。地「そもや舞樂の遊とは、その役々は誰ならん。シテ「誰なくとても御覽ぜよ。我だにあらば此の舞樂の、地「鼓は波の音、笛は龍の吟ずる聲、舞人は此の尉わらわが老の波の上に立つて、青海に浮みつつ、海青樂を

舞ふべしや。シテ「蘆原の、地「國も動かじ萬代までに。後シテ「山影のうつるか水の青き海の、

地「波の鼓の海青樂。シテワカ「西の海、憶おもが原の波間より、地「現れ出でし住吉の神、住吉の神住吉の、シテ「現れ出でし住吉の、地「住吉の神の力のあらんほどは、よも日本をば、從へさせ給はじ。速かに浦の波、立ち歸り給へ樂天。地「住吉現じ給へば、く、伊勢石清水賀茂春日、鹿島三島諏訪熱田、安藝の嚴島の明神は、娑竭しゃかく羅龍王の第三の姫宮にて、海上に浮んで海青樂を舞ひ給へば、八大龍王は、八りんやちりんの曲を奏し、空海に翔りつつ、舞ひ遊ぶ小忌衣せみぎぬの、手風神風に吹き戻されて、唐船たうせんは此所より漢土に歸りけり。げに有難や神と君、げに有難や神の君が代の、動かぬ國ぞ久しき、動かぬ國ぞ久しき。

（住吉明神の化身「とてももの事に、わが日本の風流な遊である和歌をうたつて、舞歌の曲のいろいろをお見せしませう。」

白樂天「一體舞樂の遊をなされるといふが、その管絃の持ち役は誰々なのでせう。」

住吉明神の化身「誰も居なくてもよいから御覽なさい。私さへ居れば、この舞樂の鼓は波の音がとめるし、笛は海中の龍の吟ずる聲がそれで、舞手は即ちこの年寄が、額ぬかの波そのまゝの



波の上に立つて、青い海に浮みながら、海青樂といふ舞樂を舞ひませうよ。」

舞の文句『日本の國は動くまい、千年萬年の後までも。』

住吉明神（登場）「山の影がうつる。せむか水が青い海上で、波の鼓につれ、海青樂を舞はう。」

住吉明神「自分は、西海九州の檣が原の波間から出現した住吉明神である。この住吉の明神の力のある限りは、お前がまさかわが日本を屈伏させることは出来ないであらう。速かに、この岸邊の波の寄せては返ることく、立ち歸りなさい。白樂天よ。」

かやうに住吉明神が出現し給ふと、伊勢大神宮を始めまつり、石清水、賀茂、春日、鹿島、三島、諏訪、熱田、殊に安藝の嚴島の明神は、八大龍王の一なる娑竭羅龍王の第三の姫宮なので、明神が海上に浮んで海青樂をお舞ひになると、八大龍王は、八種の樂器で曲を奏し、空や海に飛びかけりつゝ舞ひ遊ぶその淨衣の、手を動かす時の風が自然神風となつて、白樂天の乗船は吹き戻され、支那の船はわが國から支那に逃げ歸つてしまつた。まことに有難い神様と御主君、まことに有難いことだ。神様のごとき天子様の御代は、動かぬ國として長く榮え行く。

これは世阿彌の作、「白樂天」の後半で、白樂天がわが國を屈伏させようと出かけたのを、和歌の神の住吉明神が追ひ返されるといふ内容であるが、ここに國家的文學と外來文學との關係について、國粹的な剛健な思想の宿されてゐることが注意される。まさに文化的な意味での外冠擊退である。世阿彌はよく、わが國や支那、印度の古典に通じ、巧みにこれを攝取消化して、その作になる謡曲の中に、打ち込んでゐるから、謡曲における古典的感覚が一層高いのである。このやうに、いづれの點から云つても、世阿彌はすぐれた大藝術家であつた。

世阿彌は又、謡曲の創作ばかりでなく、藝術の評論をし、創作の方法についても、哲學的に精緻な思索を行つて、世界でも、この時代としては類のない考察を完成した。その藝術論集を『世阿彌十六部集』と云ふ。

狂言

狂言は、謡曲の森嚴なのに對し、喜劇として發達したもので、これは何人の作か明かでないが、大名とか、山伏とか、或は平民を對象とし、中には、スリを取扱つた作品も多くて、様々の失敗を

演ずる明朗なをかしみの中に、辛辣な諷刺を藏したのものもある。謡曲の嚴肅と狂言の輕妙とが相互に演じられることによつて、その効果を發揮するやうに仕組まれてゐるのも巧みであるが、謡曲よりも狂言の方が、戯曲としての性質は、より完全に近い。

シテ「やれ〜骨折や。して末廣がり求めて來たか。アド「成程、求めて參りました。

シテ「それはでかいた。急いで見せい。アド「畏まつてござる。さらばお目に懸けませう。

シテ「どれ〜、ハア汝は都へ上つて雨に逢うたと見えて、傘を求めて來たか、先づ其の末廣がりを見せい。ト云うて、傘を捨てる。アド「ハア扱はお前にも御存じないさうにござる。追付け末廣がりに致してお目に懸けませう。それ〜、何と末廣がりになりませうが。シテ「あれは何をぬかしをる事ぢや。アド「扱お好みにも悉く合ひました。先づ地紙ようとう申すは此の紙の事、美濃紙の上々を以て天氣のよいに張りましたによつて、これこん〜いたす。シテ「きやつは氣が違うたさうな。アド「骨に磨きをあてと申すも此の骨の事。物の上手が信濃木賊掠とくろくの葉を以て七日七夜磨いたによつて、これすべ〜いたす。シテ「呆れもせぬ事をぬかしをる。アド「要しつと

と申すも此の要かなめの事。これをかうして何處何方まで參つても、ぎつくりともいたす事ではござらぬ。シテ「まだおりやらうが。アド「戯ざれあ繪な。シテ「扱々憎い奴かな。アド「傘の柄にてヤア〜と云うてかゝる。シテ「これは何としをる。アド「餘りお騒ぎなされますな、此の柄で戯ざるるによつての戯柄ざれえ、繪の事ではないと申します。シテ「扱々うつけた奴かな。知らずば何故なげに問うて行かぬ。末廣がりといふは扇の事ぢやわい。アド「ア、扱は扇の事でござるか。

これは「末廣がり」といふ狂言の和泉流で行ふものの一節である。末廣がりまひろがりは扇の事で、扇を末廣がりといふ事を知らぬ愚かな太郎冠者が都に出て、スリから、これが末廣がりであると云つて、扇の代りに破れ傘を買はされ、それを持つて歸つて大名に叱られるといふ筋。扇の特色と古傘の特色がびつたりと合つてゆく滑稽がこの狂言の山で、後世の落語なども、かういふ所から源が出てゐる。さういふ意味でも、國民演劇の古典として、能樂と共に甚だ貴重なものとなつていなければならない。

50

連歌と俳諧

鎌倉時代に起つた連歌は、此の時代に至つて一層盛んとなり、宗祇の如きすぐれた連歌師も出たが、此の時代の末に近い頃、生真面目で、且煩瑣な法則の多い連歌に對し、滑稽な趣とともに、作法の自由な俳諧が起つて來た。山崎宗鑑や荒木田守武が、これを稱導して、世に行はれるに至り、更に江戸時代となつて、大いに發展したのである。

雪ながら山本かすむ夕かな

(宗祇)

元朝や神代の事も思はるる

(守武)

戦記文學

又、戦記物としては、『太平記』『曾我物語』『義経記』がある。

『太平記』は、小島法師の作と云はれ、吉野時代の戦亂を取扱つて、吉野の朝廷における、上下の

諸臣の盡忠の活動を、雄勁な筆致で記したもので、楠正成の事なども、詳細に描かれてゐる。四十卷にわたる長大な作品である。

其日やがて正成は五百餘騎にて都を立ちて、兵庫へとぞ下りける。楠是を最後と思ひ定めたりければ、嫡子の正行が十一歳にて、是も供せむとてありけるを、櫻井の宿より河内へ返し遣はすとて、泣く泣く庭訓を残しけるは、獅子は子を産みて三日を経る時、萬仞の石壁より母是を投ぐれば、それ獅子の子の機分あれば、教へざるに、宙より身翻して飛び揚り死する事を得すと云へり。況や汝は已に十歳に餘れり。一言耳の底に留まらば、わが教誡に違ふ事なかれ。今度の合戦天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見ること、是を限りと思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代となるべしと心得べし。然りといへども、一旦の身命を助けんために、多年の忠烈を失ひて、降參不義の行跡をいたす事あるべからず。一族若黨一人も死残りてあらんほどは、金剛山に引籠り、敵寄せ來らば、命を兵刃に落して、名を後代に残すべし。是を汝が孝行と思ふべしと、涙を拭きて申し含め、各東西に別れにけり。其の有様を見聞く人、猛き軍

士も父子の心底を思ひやられて、鎧の袖をぞ濡らされける。

(この日直ちに楠正成は五百餘騎で都を出發し、兵庫に向つて下つて行つた。正成は、この時が最後の戦と心をきめてゐたから、嫡子の正行が十一歳で、これもお供をしようとして一緒に居るのを、櫻井の宿から河内へ返してやらうとして、泣く泣く父の教訓を與へた。その言葉に、「獅子は子を生んで三日たつと、萬丈の涯から母がこれを投げ落すのに、その子が獅子としての本性を持つて居れば、教へなくても、空中で身をはね返して飛びあがり、死ぬる事はないと云つてゐる。ましてお前は既に十歳を過ぎてゐる。一言でも自分の云ふことが記憶に残るならば、自分の教訓にそむいてはならんぞ。今度の戦は天下の安危の分れ目と思ふから、此の世でお前の顔を見ることは、これ限りだと思ふのである。正成が最早戦死をしたと聞いたなら、天下はきつと足利高氏のものとなるであらうと考へておくがよい。併しさういふことがあつても、一寸自分の命を助かりたいために、長年忠義をつくして來た名譽を失ひ、敵に降参するやうな大義名分にはづれた行爲をするやうな事があつてはならん。一族の者が若黨でもよい、一人でも生き残つてゐる間は、金剛山に立て籠つて、敵が押し寄せて來たなら、生命を戦場で落して

も、名を後世に残すやうにせよ。是がお前の孝行だと思へ」と、涙をふいて云ひ含め、親子は東西に別れてしまつた。この有様を見たり聞いたりした人は、勇猛な武士でも、父子の心中を想像して、鎧の袖を涙で濡らしたのであつた。)

『太平記』の櫻井驛楠公父子別れの場である。『太平記』は、楠公を中心として、このやうな感動に富む場面が多く、それは、太平記讀と云はれる講釋師によつて廣く民間に語り傳へられ、後代の文學にも大きい影響を與へた。かくて、争亂の物語をすべて太平記と云ふやうにもなつたが、その内容の國家的な事と、傳播流布した階層の國民的な事と、いづれの點から見ても、本書は、國民文學の代表的古典となつてゐる。

『曾我物語』は、曾我兄弟の仇討の顛末を書いたもの、『義經記』は、源義經の一生を記して、兄頼朝の怒を受け、奥州衣川で悲壯な最期を遂げる所まで記してゐる。此の二書ともに、その不遇な境遇が讀者の同情心を誘發して、甚だ行はれた。かくて、曾我物語は後に大きい精神的影響を與へ、又、判官びいきといふ言葉も生じた。

お伽草子

此の時代の特色を持つ小説に、お伽草子がある。種々の空想的な題材を捕へて、童話的な要素が多く、動植物を擬人化した作品などが出た。『文正草子』『物臭太郎』『鉢かつぎ姫』『一寸法師』『浦島太郎』の如き作があり、いづれも素朴な筆致で書かれ、短篇が多い。今日に傳へられる國民童話の源は、多くこの時代に胚胎し、お伽草子も亦さうした性質の物語の現れである。

次に引くのは『浦島太郎』の冒頭である。

昔丹後の國に浦島といふもの侍りしに、其の子に浦島太郎と申して、年のよはひ二十四、五の男ありけり。あけくれ海のうろくづを取りて、父母を養ひけるが、ある日のつれづれに、釣をせんとて出でにけり。浦々島々入江々々、至らぬ所もなく釣をし、貝を拾ひ、みるめを刈りなどしける所に、繪島が磯といふ所にて、龜を一つ釣り上げける。浦島太郎此の龜に云ふやう、汝生しやうあるものの中にも、鶴は千年龜は萬年とて、命久しきものなり。忽ち此處にて命を絶たん事、いたは

しければ助くるなり。常には此の恩を思ひ出だすべしとて、此の龜をもとの海に返しける。

かういつた調子の文章である。従來の擬古的な物語作品は、お伽草子には極めて少くなつた。

舞の木その他

此の時代に、桃井幸若丸の始めた幸若舞といふ舞踊が行はれ、それに合せて歌はれた詞章を記したものを舞の本と云ひ、これもお伽草子の一種とせられてゐる。その中には判官物と曾我物が多く、又、玉取傳説を取材した『大職冠』、ギリシヤのホーマーが作つたオデッセーの物語が入つて來たものと云はれる『百合若』の如き、民間の傳説も取り扱はれてゐる。イソップの童話も、此の時代の終に入つて來たが、これは、吉利支丹宗の傳來に伴つて、さういふ西歐の文學が渡來する機會を得るやうになつたのである。

和歌

和歌も、此の時代には衰へて、勅撰集は、遂に、二十一代目の『新續古今集』を以て絶えるに至つた。併し、非常に危難な時に直面すると、和歌に情懷を託して、すぐれた作品が出来るもので、吉野時代には、吉野の朝廷の方々の作を集めた、立派な歌集が現れてゐる。即ち、准勅撰集として『新葉集』が出で、又、後醍醐天皇の皇子として金枝玉葉の御身で、つぶさに辛酸を経験あそばされた宗良親王の御歌集を、『李花集』と申す。『新葉集』も宗良親王の御撰である。

身にかへて思ふとだにも知らせばや民の心の治めがたきを

(後醍醐天皇御製。新葉集)

(すべて後醍醐天皇の御製には、戦亂を悲しまれた畏多い御製を多く拜誦する。)

雁だにもしをれてぞ鳴く越路までさすらへし身を思ひやらなん

(李花集)

君がため世のため何か惜しからん捨ててかひある命なりせば

(同)

これらの御製御歌を拜誦して、その御辛苦を拜察し、われわれの精神の感動を今日において新ししなければならぬと思ふ。

なほ、此の時代の終には豊臣秀吉の如き大名も、和歌や連歌を作つてゐる。

### 隨筆文學

隨筆としては『徒然草』が出た。吉田兼好の著である。『枕草子』に倣つて、更にそれよりも深い思案を藏し、生活の上に教訓となるべき所が少くない。兼好は、和歌にもすぐれて、當時和歌四天王と云はれた歌人の一人であつた。次は、その輕妙な諷刺を見るべき一例。

ある者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちけるを、ある人、御相傳浮ける事には侍らじなれども、四條大納言撰ばれたるものを、道風書かん事、時代や違ひ侍らん、覺束なくこそと云ひければ、さ候へばこそ世に有り難きものには侍りけれとて、いよく祕藏しけり。

(ある者が、小野道風の書いた和漢朗詠集と稱するものを持つてゐたが、ある人が、「代々御相傳の品ゆゑい加減なものではありませんまいが、藤原公任の編纂した書を、それよりもずつと昔の道風が書くといふのは、時代が違やしませんか。不思議ですな」と云ふと、「それだか

らして、世にもめづらしいものなのですよ」と云つて、いよいよ大切にした。

歴史文學

歴史の作品としては、史論の書に、北畠親房の『神皇正統記』がある。親房は吉野朝廷の忠臣で、敵に對し、東奔西走する忙がしい軍務の間に、殆ど参考書とでもなく、たゞ憂國の至誠が溢れ出て、此の書と成つたものである。日本を神國と斷じ、國體の根本たる重大な問題を歴史的に論じ來つて、その中に著者の忠君の熱情が自然と迸つてゐるのである。かやうに、苦酸の境涯に居られた吉野朝廷の人々によつてすぐれた文學作品が數々出てゐる事を注意すべきである。

ただわが國のみ天地開けし始より、今の代の今日に至るまで、日嗣を受け給ふ事よこしまならず、一種姓のうちにおきても、おのづから傍より傳へ給ひしすら、なほ正に歸る道ありてぞ保ちましましける。これしかしながら、神明の御誓あらはにして、餘國に異なるべき謂なり。

(世界でも、たゞわが國だけが、天地開闢の始以來、現代の今日にいたるまで、皇位を繼承し

給ふ事が誤つてゐないのである。一系の中においても、自然支流から皇位をお傳へになつた方があらせられたが、それさへ、やはり實は、本流に立ち歸られる道理があつて、御位を保たれたのであつた。併しながら、これはすべて神様の御心がこの世に現れての事で、外國とは異なる理由があるのである。)

これは『神皇正統記』の初の方で、國體精神に徹した歴史觀を見るべきである。これによつてわれわれの歴史觀にも考へ學ぶべき點が悟らされる。ここに古典の精神の生きて働く不滅の生命が宿つてゐるのである。

更に、擬古文の歴史物語としては『増鏡』が出た。遠く承久の亂より、北條氏滅亡までの歴史を述べ、その間、君臣の情の力強い發露や、宮廷の生活の模様が優美な筆致で書かれてゐるが、建武の中興で筆を終へて、足利高氏の叛亂に及んでゐないので、明るい感じを以て讀み終る事が出来る。

此のおはします所は、人離れ里遠き島の中なり。海面よりは少し引入りて、山蔭に片添へて、大

きやかなる巖のそばだてるを便にて、松の柱に葦葺ける廊など、氣色ばかり、事そぎたり。まことに柴の庵のただ暫しと、かりそめに見えたる御宿りなれど、さる方になまめかしく故づきてしなさせ給へり。水無瀬殿思し出づるも夢のやうになん。はるばると見やらるる海の眺望、二千里の外も残なき心地する、今更めきたり。鹽風のいとちたく吹き來るを、

我こそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け

(隠岐で、後鳥羽上皇のおいであそばすお所は、人目も少く村から遠く離れた島の中であつた。海岸からは少し引つこんで、山蔭となつてゐる所にくつつけて、大きな巖のつき立つてゐるのを利用して、松の柱に、葦を葺いた廊下など、ほんの型ばかりで、簡素なお住居である。本たうに柴で造つたた庵室のやうに、ごくわづかの間の事と、假そめの佗住居のやうに見受けられるお住居ではあつたが、それ相應に優美に風流に造り設けさせられてゐた。都の水無瀬の離宮を思ひお出しになるにつけてもまるで夢のやうである。はるかな遠方を御覽あそばされる海の眺も、白樂天の詩のやうに、二千里の外までも、残る所なく見られる心地があそばすのも、今更そんな事を思ふのは愚痴つばいことのやうにお思ひになる。海の風がひどく烈しく吹

いて來るので、

我こそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け

自分は、今度始めて來た新米の島守だから、隠岐の海の荒い波風も、少しては手加減をして吹いてくれ。

『増鏡』の中でも名高い新島守の一節、隠岐に遷幸あそばされた後鳥羽上皇の御生活を描きまつたもので、後に同じ御體験を経させられた後醍醐天皇の御事蹟とともに、心より恐懼に堪へないものである。



## 江戸時代文學

### 江戸文學の特色

江戸時代となつて、町人が勃興し、文學も、平民文學としての特色を帯びるやうになつた。それとともに、印刷術が進歩して書籍を購入し、文學を享受する人が甚だ増加したので、文學は非常な勢力を持つやうになり、廣く世に普及して、大いなる發達を見たのである。

### 上方と江戸

此の時代の前半は、從來に引き續いて、京阪地方即ち上方かみがたに文學の中心があり、後半になつて、新しく興つた都市、江戸に文學の中心が移つた。さうして、種々の文學が起り、それぞれに潑刺たる活動をしたのである。

### 國學と漢學

後水尾天皇は學問を好ませられ、又、和歌に秀で給うたが、徳川幕府も學問を奨励したので、先づ漢學が起り、續いて、わが國の古典も研究せられるやうになり、特に上代文學の研究が行はれて、そこからわが國民の純粹の精神を體得し、國體の本義を理解して、現代の生活の上にこれを生かす事を目的とした。これが國學であつて、契沖によつて、その基礎が置かれた。さうして、上代の文學の中でも、『萬葉集』が最も代表的なものであるから、その研究が盛んに行はれて、契沖は、これに文學的な研究を加へた最初の人である。その著、『萬葉代匠記』は、『萬葉集』の全部の註釋としては、始めて世に出たもので、老大な書である。契沖の影響によつて、荷田春滿かたのあつまるが現れ、その弟子の賀茂真淵に至つて、『萬葉集』に現れた上代精神が、當代の和歌の中にも生かされるやうになつた。

真淵の門下の本居宣長は、『古事記』の詳しい研究書なる『古事記傳』を完成し、その門の平田篤胤は、上代精神の實踐を志して、復古神道を起した。此の四學者を國學の四大人と云ひ、それぞ

れに和歌の作品を残すとともに、文學作品や國民精神の上に偉大な影響を與へたのである。

和歌

眞淵は萬葉調を鼓吹して、その門に萬葉歌人田安宗武が出たが、同じ門下でも、宣長は新古今調の方をよしとし、春滿の甥の荷田在滿も新古今派であつた。又、眞淵門の橘千蔭や村田春海は、江戸派と云つて、『古今集』と『新古今集』とを折衷した優美な一體を作り上げた。

萬葉主義に反對して起つたのは、たゞこと歌を稱へた小澤蘆庵や、その影響を受けて調しらべの説を立てた香川景樹の稱導する古今調である。次に、これらの歌人の作例を掲げよう。

雲雀あがる春の朝けに見わたせばをちの國原霞たなびく

(眞淵)

學ばでもあるべくあらば生れながら聖にてませどそれなほし學ぶ

(宗武)

たぐひなき櫻の花を見ても知れわが大君の國のこゝろを

(宣長)

墨田川簑着て下す筏士に霞むあしたの雨をこそ知れ

(千蔭)

蝶よく花といふ花の咲く限り汝がいたらざる所なきかな

(景樹)

萬葉派は純朴な表現と、そのまことまことの精神を貴しとし、古今派は、『古今集』のなだらかな聲調と、普通の用語の中の雅みやびかな言葉の使用とを喜び、新古今派は、『新古今集』が、和歌の歴史の上で、これが最も發達した表現を持つものであるといふ觀點から論じた。併し、萬葉派と古今派とが最も勢力があり、就中すぐれた作品は、幕末の萬葉派の歌人によつて詠まれたが、それらは、自然の感動を、單純に表出したもので、又、愛國の至情と結合し、勤皇の志士も、萬葉派の歌人の中から數々出てゐる。越後の良寛、岡山の平賀元義、福井の橋曙覽、福岡の大隈言道等すぐれた歌人には地方に出た人が多く、勤皇志士としては、吉田松陰、佐久良東雄、平野國臣、女性に野村望東尼等がある。この國家的精神の發露が、最も萬葉的な上代精神の眞髓を得たものである。

たちねの母がみ國と朝ゆふに佐渡が島邊をうち見つるかな

(良寛)

えみしらを討平けて勝鬨の聲あげそめん春は來にけり

(元義)

國を思ひ寝られざる夜の霜の色月さす窓に見る劍かな  
 妹が脊にねぶる童のうつなき手にさへめぐる風車かな  
 身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大和魂  
 あきつ神わが大君のおはします京みやこの土は踏むもかしこし  
 大君に捧げあまししわが命今こそ捨つる時は來にけれ  
 わがためを祈るにはあらず神佛御代のみための人のためなり

(曙 覽)  
 (言道)  
 (松 陰)  
 (東 雄)  
 (國 臣)  
 (望東尼)

これらの國民の詠歌と對照しまつるのは長多いが、幕府が政權を握つてゐても、至尊は御製において大御心を垂れさせ給うた。それが國民の心に映發して、勤皇志士をもふるひ立たせたのである。この和歌の項を結ぶに當つて、御製を謹記しよう。

思ふにはまかせぬ世にもいかでかはなべての民の心やすめん  
 身の上は何か思はん朝な朝な國やすかれと祈る心に

(櫻町天皇御製)  
 (櫻町天皇御製)

戈ことりて守れ宮人九重の御階みかたの櫻風そよぐなり  
 朝夕に民安かれと想ふ身の心にかゝる異國ことくにの船

(孝明天皇御製)  
 (孝明天皇御製)

寂慮畏しとも畏し。(近世和歌史概説と愛國和歌概説の兩篇参照)

俳 諧

俳諧は、此の時代に至つて隆盛となり、松永貞徳の貞門や西山宗因の談林派等が行はれたが、元祿時代に松尾芭蕉が出るに及んで、從來の卑俗な滑稽趣味を棄て、自然の神祕に參じ、人生の寂寥に徹しようとする藝術味の高い句が作られるに至つた。それは卑俗な猿樂を崇高な能學に完成させた観阿彌、世阿彌の業績にも似てゐる。又、芭蕉は諸國を行脚して、旅行の寂しさ苦しさの中に、嚴肅な人生を體驗し、これを筆に上せた。「奥の細道」等の紀行文、「幻住庵の記」等の俳文は、獨自の風格を有する作品である。

枯枝に鴉のとまりけり秋の暮 (芭蕉)  
初時雨猿も小篋をほしげなり (同)

連句として、上下句を作り続ける形式の俳諧も盛んに行はれてゐた。

市中は物のにほひや夏の月 (凡兆)  
暑しくと門々の聲 (芭蕉)

これらの芭蕉及びその門下の作品は、『俳諧七部集』と稱せられて、蕉門の人々の編纂にかゝる『冬の日』『春の日』『曠野』『猿蓑』『炭俵』『續猿蓑』によつて、主として知ることが出来る。これらは、俳諧の方では、立派な古典である。

次に『奥の細道』の一節を抜いて、その俳文を味つて見よう。なほこの時代からは、文章の方の引例にも解釋をつけないことにする。

山形領に立石寺と云ふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地なり。一見すべきよし人々の勤むるに依りて、尾花澤よりとつて返し、其の間七里ばかりなり。日いまだ暮れず、麓の坊に宿借り置きて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ちて物の音聞えず、岸をめぐり岩を這うて佛閣を拜し、佳景寂莫として心澄み行くのみ覺ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲 (奥の細道)

芭蕉はさび・しをり・ほそみ・輕み等を句作の眞髓とし、又、不易・流行を説いて門生を導いた。これは俳諧精神の端的な現れで、又わが國獨特の文藝上の理念である。

芭蕉以後、俳諧は一時墮落したが、天明時代に與謝蕪村が出て、清新な繪畫的、客觀的な句風を以て、天明調の俳句を起した。その中には、わが國獨特の幻怪味を漂はした作もある。又、此の時代には、横井也有の俳文も輕妙洒脫な行文を以て名高く、『鶉衣』はその俳文集である。

芭蕉の『俳諧七部集』に對して、蕪村にも、その一門の句集を集めた『蕪村七部集』と稱せられ

る種々の書がある。これ又俳道の古典と云つてよからう。

春の海ひねもすのたり／＼かな (蕪村)

不二ひとつづみ残して若葉かな (同)

蚊はにくむべき限りながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕べ、始めてほのかに聞きたらん、又は長月の頃力なく残りたるは、寂しき方もあり。蚊屋釣りたる家のさま、蚊やり焼く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙ひまなかりけむ。(鶉衣、百虫譜)

文化文政時代には、小林一茶が現れ、動物に至るまで暖い愛情を注いだ、人間味に富む独自の句境によつて、すぐれた作品を生んだが、大勢は、月並調と云はれる平俗な傾向の中に墮落して行つたのである。一茶の追憶記である俳文の『おらが春』は、彼の残した多くの作品の中でも最も名高  
50。

「親のない子はどこでも知れる、爪を唾つばへて門に立つ」と子供等に唄はるるも心細く、大方の交りもせずして、裏の畠に木萱など積みたる片陰にせぐくまりて永の日を暮しぬ。わが身ながらも哀れなりけり。

われと来て遊べや親のない雀 六歳彌太郎(おらが春)

やれ打つな蠅が手をする足をする (一茶)

川 柳

別に天明時代には川柳が行はれた。これは、俳諧の變化した前句附から出てゐて、前句附の撰者の一人なる柄井川柳が最も名高かつたから、川柳點の前句附といふのを略して、ただ川柳と稱するやうになつた。市井の生活や、歴史上の事件人物を扱ひ、皮肉や諷刺を含む作品を作つたのであるが、その中には、人情の自然に徹したをかしみを盛つて含蓄に富む作も少くない。

川柳の句集を『俳風柳樽』といふ。併し、初代川柳の歿後、墮落して、つまらない狂句が行はれた。

かみなりを真似て腹掛やつとさせ

(初篇)

石山でつくねんとしたうつくしさ

(二篇)

前は、家庭生活の一断面を捉へ、後は、石山の紫式部を想像してよんだ歴史句である。

### 狂歌

和歌を滑稽にした狂歌も江戸時代を通じて盛んに行はれ、滑稽を好む當代の特色を遺憾なく發揮したものであるが、元祿時代の鯛屋貞柳と、天明時代の四方赤良(蜀山人)とは、最もすぐれてゐた。文化文政時代には、赤良の弟子の宿屋飯盛と鹿都部眞顔が出たが、既に輕妙洒脱な趣は薄れて、やがて衰へ行く前徴を示してゐた。狂歌の中では、特にパロディー(地口)が、わが國の文學の特色の一面を現して、一種の日本的風格に觸れるものがある。

月見れば干々に芋こそ喰ひたけれわが身一人のすきにはあらねど

(蜀山人)

併し概して、これらの文學は、卑俗輕薄で、大文學とも云ふべき崇高さや、國民文學のごとき氣魄はないが、當時の民衆層に弘く行はれたことは、前後に比類を見ないほどで、そこに當代の一般的風潮が流れてゐたのである。

### 假名草子

次に散文文學の方面に移ると、此の時代の初には、假名草子と云はれる書が種々出で、これは、漢文で書かれた書籍に對して、假名で書かれた。平民向きの啓蒙的な作品の總稱である。その内容は種々雑多で、神道・儒教・佛教の教を平易に説いた書や、名所案内の書や、處生訓を記した隨筆等があり、又、室町時代のお伽草子も刊行せられ、擬古的な趣味の小説も作られたが、その中には、イソップ寓話の翻案なる『伊曾保物語』、支那の怪談小説の翻案なる『御伽婢子』等もあつた。

### 浮世草子

元祿時代に至つて、現代生活を對象とする作品が起り、井原西鶴が出て、一時期を劃した。これ

を浮世草子と云ふ。西鶴は、當時の武士の義理固い生活や、町人の金銭に使役せられる生活を描いて、その鋭い眼光は世相の表裏を見のがさず、辛辣な筆致を以て、紙上に活寫したのである。「日本永代藏」「世間陶算用」等は、その傑作で、此の他、裁判小説や奇譚集をも著はしてゐる。次はその作例。

口の虎身を喰み、舌の劍命を断つは、人の本性に非ず。憂ふるものは富貴にして愁へ、楽しむ者は貧にして楽しむ。嵐は雲吹き晴れて、名月院の眺、鎌倉山の秋の夕暮を急ぎ、青砥左衛門尉義綱、駒を歩ませて滑川を渡りし時、聊か用の事ありて、火打袋をあくるに、十錢に足らざるを川浪に取落し、向ひの岸根にあがり、里人をまねき、わづかの錢を、三貫文與へて是を尋ねさせけるに、あまたの人足松明を手ごとに、水は夜の錦と見え、人の足手はしがらみとなつて瀬々を立ち切り探しけるに、一錢も手にあたらすして難儀する事暫くなり。たとへ地をさき、龍宮までも是非に尋ねて取出せと下知する時、一人の人足、仕合せと一度に三錢探し當り、其の處をかへず、又は一錢二錢づつ、十錢ばかり取出せば、青砥左衛門勘定合せて喜ぶ事限りなく、其の男に

は外に褒美を取らせ、これそのまま捨て置かば、國土の重寶朽ちなん事本意なし。三貫文は世にとゞまりて人の廻り持と下人に語りて通りける。此のことわり聞きながら、一文惜しみの百知らずとぞ笑ひしは、智慧の淺瀬を渡る下々が心ぞかし。(武家義理物語卷一、我が物ゆゑに裸川)

浮世草子も、模倣作が多く出て、次第に衰へ、ただ八文字屋自笑と江島屋其碩とが共力して著した八文字屋本だけが、可成り後にまで名聲を保つてゐたが、天明時代となるに及んで、遂に浮世草子は亡び、それに代つて讀本が勃興した。

讀 本

上田秋成は、青年時代に、八文字屋本を真似た小説を作つたが、後年には、『雨月物語』の如き名作を出した。これは讀本の濫觴の一つとなつてゐる。『雨月物語』は、多く支那の怪談小説に材料を得たものであるが、全く、日本風にこれを消化して、凄惨な物語を作り上げた。

かくて、文化文政時代に至り、山東京傳、續いて、曲亭馬琴が出て、讀本は大成した。馬琴は、

勸善懲惡主義の精神のもとに、傳奇小説を著はして、雄大な構想と複雑な事件の間に、多數の人物を配置し、しかも、整然たる統一を以て、變化の妙を盡したのである。その讀者には上流の者が多かつた。『南總里見八犬傳』の如きは、馬琴の代表作で、これは世界においても有數の長篇小説である。

さる程に、犬塚信乃は、侮がたき見八が武藝に敵を得たりけりと思へば、勇氣彌倍して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音被聞、兩虎深山に挑む時、鏗然として風發り、二龍青潭に戰ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏なれば夕の虹かと見るばかりなる、いと高閣の棟にして、死を争ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鏢、眩當の端を裏缺くまでに切裂かれしかど、太刀を抜かず、信乃は刀の刃も續かで、初に淺痕を負ひしより、次第に疼を覺れども、足場を揃りて、撓まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を、見八右手に受けながして、返す拳につけ入りつゝ、ヤツと被けたる聲と共に、眉間を望みて破と打つ、十手を丁と受け留むる。信乃が刃は鏢際より、折れて遙に飛失せつ。見八得たりと、無手と

組むを、そが隨左手に引着けて、迭に利腕楚と拿り、振倒さんと曳聲合して、揉みつ揉まるゝ力足、此彼齊しく一踏込らして、河邊の方へ滾々と、身を輾ばせし覆車の米苞、坂より落すに異ならず。高低險しき棧閣に、削りなしたる蕤の勢ひ、止まるべくもあらざめれど、迭に拿つたる拳を緩めず。幾十尋なる屋の上より、末遙なる河水の底には入らず、程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、うち累なりつゝ、磔と落つれば、傾く舷と立つ浪に、水入と音す水烟、纜丁と張切りて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐き出だされつ、爾も追風と虚潮に、誘ふ水なる洄舟、往方も知らずなりにけり。(里見八犬傳第四輯卷之一第三十一回水閣の扁舟兩雄を齎く、江村の釣翁雙狗を認る)

これは有名な芳流閣の兩雄血闘の一場面を描寫したものの、雄勁な筆致の中に、讀本の特色を見るべきである。かくて馬琴調ともいふべき一體の文學を完成させてゐる。

併し、馬琴死んで、讀本も亦衰へた。



滑稽本

傳奇的な内容に特色を持つ讀本とともに、滑稽小説も亦、天明時代に起つた。これを滑稽本と云ひ、風來山人（平賀源内）等が、これを作つたが、文化文政時代以後、一層盛んとなり、就中、十返舎一九と式亭三馬とが、その代表作家で、一九の『道中膝栗毛』は、東海道の他諸國に及んで、方言の挿入に、地方色を見せ、興趣の深い内容が、自然實用的な旅行案内の用をも足したのである。三馬の『浮世風呂』『浮世床』は又、江戸の町人の市井生活を遺憾なく寫し出してゐる。これらの作品は、對話を主として記してゐるのが特色で、内容も面白味に富んでゐたから、明治になつても、なほ假名垣魯文の如き作家の滑稽本が行はれたのである。

○御膳しら菊あまいく。〔子供大勢、顔も手足も墨だらけ、黒ん坊の如くになり、目ばかり光らして、どやどやと入り来るは、手習から八つさがりと見ゆ。〕ありやりやんりうとい、ありやりやん、りやんくくく。松さんなんざあしよにんな（意地の悪い）者だぜ。おいらあ否だあ。

あら程蟲拳をして、一極をしたぢやあねえかな。ようじぶつくる（ぐづぐづ云ふ）せえなあ。あれよしねえよ。着物が切れると、内へ歸つてから叱られなあ。お前ん所の母さんは縫つちやあくれめえ。松「随分縫ふのさ。さあ出しなせえ。龜」なんの口巧者な。其時にやあ、あかすかべえだらう。あゝれよく、お前の内へ云つつけてやらあ。松「こいつあ面白え、男なら云つつけて見ろ。勝」なんだな。お前達やあよう喧嘩あするぜえなあ。吉さん御免し、御免しだよ。吉「おいらあ、しんどうき、しんときだよ。さあ湯へ這入り。誰でも早く這入つた者あゝ子だつ。又「湯から上つたらあ、あなの、貝々打をしねえか。鐵」おいら否。又「しよにんな餓鬼だなあ、そんなら今度つからお前たあ遊ばねえ。鐵」遊ばねえでもいゝ。金さんと幸さんと芝居ごつこをすらあ。（浮世風呂、午後の光景）

所謂江戸言葉の描寫を見るべきであるが、これは子供の對話である。

洒落本・咄本・人情本

洒落本は儒學生などの手ずさみに書いたのがもとで次第に發達し、天明時代には、種々の作が多數出たが風俗を害するもの多く、當局から禁止せられた。この當時には、又、短い落語を集めた小咄が澤山出て、この笑話集も、江戸時代の初の『醒睡笑』以來あまた現はれ、就中元祿時代には、種々の落語家の作が出たが、天明時代にいたつては、輕妙洒脫な獨特の趣を發揮して、洒落本や滑稽本にも通じるものがあり、今日の落語の淵源をなしてゐる。當時は滑稽、をかしみが文學の中心であつた。

洒落本が禁止せられたので、洒落本作家の代表者である山東京傳などは、すつかり讀本作家に轉向してしまつた。かくてこれより、一變して、天明時代の作は短篇が多かつたが、文化文政時代となつては、長篇小説の流行の機運に乗じ、長篇の人情本が出て、爲永春水などが活躍したが、やはり風俗を害するので、忽ち禁止せられ絶滅した。洒落本を、こんにやく本とも云ひ、人情本は滑稽本と共に、中本とも稱されてゐる。

これらは古典と云ふには餘りに卑小なものであるが、文學の歴史の系列の中に加へて、その一環を補充する用に供しようとして、ここに述べたのである。

草 双 紙

讀本といふ名稱は、別に繪を見る本があつたから、それに對してこの名が出てゐる。その繪を見る本といふのは、全篇繪畫を主とし、繪説ゑせつの文章を従とする草双紙くさふたじの事を云ふのである。草双紙は江戸で發達したもので、初め、元祿時代に、子供繪本の赤本あかほんがあり、これが天明時代に至つて、大人の讀物である黄表紙わうへうじとなつた。併し、毎頁繪があつて、繪を主とした事は、やはり同じである。

文化文政時代となつて、一般に長編小説の歡迎せられる傾向があつたので、草双紙も内容に長大な分量のものが現れ、黄表紙を數冊合綴して一冊とし、それに美麗な錦繪表紙を付した。これを合卷物あひまきものといふ。柳亭種彦は、その代表作家で、源氏物語を翻案した『偽紫田舎源氏』を出した。このやうに、かういふ卑俗など思はれる作品の中にも、平安時代の古典が搖曳して、これが大奥の女中などの古典趣味に甚だ歡迎せられたのである。合卷物の内容は、讀本を平易にした形のもので、學問のない低い程度の讀者から喜ばれ、明治十年代まで、續いて出てゐたが、新しい文學に壓倒せられて亡んだ。併し、新聞小説に毎回挿繪を入れるのは、はじめ此の草双紙の形式を眞似て生じた

ものであると云ふ。

今は昔、片田舎に金村屋金兵衛といふ者ありけり。生れつき心優にして浮世の楽しみを盡くさんと思へども、至つて貧しくして心に任せず、よつてつくづく思ひつき、繁華の都へ出て奉公を稼ぎ、世に出で思ふまゝに浮世の楽しみを極めんと思ひ立ち、まづ江戸の方へと志しけるが、名に高き目黒不動尊は運の神なれば、これへ参詣して運の程を祈らんと詣でけるが、早日も夕方になり、いと空腹になりければ、名代の栗餅を食はんと立ち寄りける。抑々目黒不動尊は靈驗著しく、あまねく諸人の知る所なり。本尊は慈覺大師の作にして、寺號を龍泉寺と云ふ。此處の名産栗餅并に餅花といふものあり。竹を割りて、華鬘の如くに結び、これに赤・白・黄の餅を花の如く付けるなり。よつて餅花といふ。

「何でも江戸へ出て、番頭株と漕ぎつけ、算盤の玉はづれを、しこ溜め山と出かけて、おこりを極めませう。もしもし、も早何時でござりませうの。何なりと頼みます。」

「あい、大方晝過でございませう。奥へお通りなさりませ。」

(金々先生榮華夢)

これは戀川春町の著で、黄表紙の代表作。この書が出て、黄表紙は向上しその位置が定まつたものである。江戸に出て金持にならうと志した田舎者が上京の時、途中で一睡した假寝の夢で、さういふ金持の榮華のはかないものである事を翻然と覺り、悔悟して田舎に歸郷し、まじめな生活を送るといふ筋で、今日の世相の諷刺をさへも感じさせる。

### 戯曲

戯曲は、室町時代の能樂から發達して、平民的な歌舞伎が起り、一方、操人形に合せて語られる淨瑠璃節があつて、此の兩者が互に影響しあひ、獨特の發達を見た。

就中、元祿時代に至り、近松門左衛門が出て、多數の歌舞伎脚本や、淨瑠璃を作り、戯曲作家の位置を確立するとともに、戯曲は一大發展を遂げたのである。

近松は、義理と人情との渾然と融和した作品を書いて、人間生活の極致を示し、その中に暖い同情を注いでゐる。過去の時代を取扱つた時代物、現代生活に取材した世話物、或は、支那を舞臺に取つて明末の忠臣の孤忠を描いた「國姓爺合戦」の如き、異國情調に満ちた作品もあつて、流麗な

美しい行文とともに、よく戯曲文學の範を垂れたものである。

すは我々を見咎めて敵の取巻く攻太鼓か、又は狐のなす業かと、茫然たる其の折ふし、空凄まじく風起り、砂を穿ちどう／＼どう、竹葉さつと巻立て／＼吹捲くる、竹は劍の如く、すさまじなれども愚かなり。和藤内ちつとも臆せず、讀めたり／＼、扱は異國の虎狩な。あの鉦太鼓は勢子の者、此處は開ゆる千里が原、虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。廿四孝の揚香は、孝行の徳によつて、自然と遁れし悪虎の難、其の孝行には劣るとも、忠義に勇む我が勇力、唐へ渡つて力始め、神力ます／＼日本力、双で向ふは大人氣なし。虎は愚か象でも鬼でも一挫ぎと、尻引つからげ身づくろひ、母を圍うて立つたるは、西天の獅子王も、恐れつべうぞ見えてげり。案に違はず、吹く風と共に荒れたる猛虎の形、節根に面をすりつけ／＼、岩稜に爪とぎ立て、二人を目がけ唾みかゝるを事ともせず、弓手になぐり馬手に受け、振つて懸くれば身をかはし、撓めばひらりと乗り移り、上になり下になり命比べ根比べ、聲を力にゑいゑいゑい、虎の怒り毛怒り聲、山も崩るる如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛を捲られ、兩方ともに息疲れ、石上に突立

てば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついだる其の響、吹簫吹くが如くなり。(國姓爺合戦第二)

近松以後、淨瑠璃には竹田出雲の「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」の如き名作も作られて、戯曲的には一層發達したが、あまりに複雑で技巧的な内容が災して、次第に飽かれ、天明時代以後衰へて行くとともに、それに代つて歌舞伎は、いよいよ盛んとなり、鶴屋南北、古河黙阿彌の如き脚本作家が出て、明治時代に及んだ。次に出したのは、黙阿彌の作の一節で、明治十四年に上演せられたもの。

淨瑠璃へ過ぎし日は昨日か今日と思へども、早くも三歳立つ霧に、暫し隠れし鳥藏が、旅寝に幾夜明石湯、馴れし故郷へ立歸り、

ト是へ波の音を冠せ、花道より鳥藏好みの着附、達磨合羽脚絆尻端折り、大きなカバンを提げ、蝙蝠傘を杖に突き出で來り、花道にて、

鳥藏 わづか三年立たぬ内に、往來幅が廣くなり、穢い橋が綺麗になつて、以前にまさる立派な

學校、こんな所にも石造や煉瓦造りの見えるのは、世界は益々開けて來たな、  
へ歸るを松の片庇かたびきし、親は迎ひに立ち出でて、

ト島藏舞臺へ來る。磯右衛門門口へ出て、

磯右 お、島藏歸つたか。

島藏 や、親父様、先づお變りのないお顔を見て、まことに嬉しうござります。

お濱 兄さん、よう歸つて下さりましたな。

島藏 お、妹、そちも達者でよかつたな。

磯右 まあ、足を洗つて、早く上れ。

島藏 いえ、足は汚れはしませぬから、洗ふには及びませぬ。

磯右 そんなら早く上るがよい。

お濱 兄さん、此所へござんせいな。

しまらどりつきのしらなみ  
(島衛月白浪、二幕目明石浦漁師町の場)

人形淨瑠璃は文樂座その他によつて今日に傳へられ、歌舞伎劇も亦、今なほ盛行せられて、わが

國における古典劇を保存してゐるが、これらの完成した江戸時代の古典演劇は又、新しい國民演劇の創成に示唆するところが多いであらう。この意味で、演劇上の古典の保存が必要である。

## 明治大正時代文學

### 學藝の發達

明治時代となつて、西洋印刷術の輸入により、一層文學の普及を促し、又、學校が設けられて、教育・學術が普及した爲めに、西歐の新思想、新知識に接し、それが文學の進歩に貢獻した所も尠くなかつたのである。併し、後にはこの事が、外國模倣、歐米崇拜の弊を生じるやうになつた。かくて、此の時代の文化の偉大な發達は、明治天皇の思召より出てゐるものである事を忘れてはならない。天皇は又、わが國の和歌の歴史を通じて、第一の歌聖であらせられた。次に御製を拜誦する。

照るにつけ曇るにつけて思ふかなわが民草の上はいかにと  
天地も動かぬばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな

概原のとほつみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず

### 新文學の提唱

明治十年代までは、江戸文學の繼續であつたが、坪内逍遙の『小説神髓』によつて、新しい寫實主義の文學が提唱せられ、これが新文學の理論的な基礎となり、長谷川二葉亭は、ロシア文學の翻譯や、創作『浮雲』等によつて、從來にない口語文體の新しい作品を發表した。山田美妙も、清新な口語敬體（です調）の文章で小説を書いた。

されば小説は見えがたきを見えしめ、曖昧なるものを明瞭にし、限なき人間の情慾を限ある小冊子のうちに網羅し、之をもてあそべる讀者をして、自然に反省せしむるものなり。造物主は天地萬物を造りて私なし、恰も我黨小説作者が種々の人物を假作りいだして、毫末も偏頗愛憎なく、行往進退なべてみなひたすら、自然に戻らぬやう寫しなせるに似たりといふべし。さもあらばあれ、造化の翁が造り做したる活世界は極めて廣大無邊にして、規模のあまりに大なるから、凡庸

稚蒙の眼を以ては、原因結果の關係をば察り得ることいとく難かり。しかるを我黨小説作者が、其の因果の理の要を摘みて一小冊子のうちに藏めて、點檢取捨する便に供ふ、其の任豈重からずや。もしよく奏功なす由ありなば、其の功もまた偉大ならずや。(小説神髓上巻、小説の主眼)

新體詩

一方、新體詩が作られて、大學教授、井上哲次郎(巽軒)氏、外山正一(山)、矢田部良吉(尙今)等により、新しい文學形態が紹介せられた。此の新しい詩は、明治三十年代以後、急速な發達を見せて、島崎藤村氏の優雅な作、土井晚翠氏の豪快な調、薄田泣菫氏の古典的傾向等、種々の作が現れ、又、上田敏によつて、象徴詩が紹介せられ、その影響のもとに、薄原有明氏、三木露風氏等が出た。北原白秋氏はみづみづしい抒情詩を以つて、大正時代の詩壇に輝かしい業績を示した。今詩書の古典とも云ふべき『新體詩鈔』によつて、當初の作の一斑を示す。

山々霞み入相の

鐘は鳴りつつ野の牛は

徐かに歩み歸り行く 耕す人もうちつかれ  
漸く去りて吾ひとり たそがれ時に残りけり

(グレイ作、尙今居士譯——墳上感懐の詩)

小説

明治二十年代には、作家としては、坪内逍遙の他、森鷗外、幸田露伴氏、尾崎紅葉等が出て、むしろ雅文、又は雅俗折衷文で小説が書かれた。その間、樋口一葉が現れて、流麗典雅な文章と、人情の機微に觸れ、人生の眞を穿つた内容とにより、數々のすぐれた作品が賞讃を博した。内容や文章には、西鶴の影響も多く、又、源氏物語などの物語作品の影響も見られて、傳統文學の花が一時に咲き起つた感じがする。

樹木綠深き築山泉水見事なる御庭先に、庄屋より又少し後に正藏恐れ入つて畏まり、固唾を呑みながら、唯何となく涙ぐんで控へたり。並み居る諸士濟々たる中に悠然と座し給ひし殿、今近侍

が取次ぎて参らする一刀の鞘靜に拂ひ給へば、忽ち電光一闪帽子先より走つて、天晴れ業物見るさへまばゆし。なほよく鏝元より切先まで、切先より又手元まで、眸を凝らして見給ふに、肌濃やかに光和らぎ、地の色秋の空を湛へて、いかにも青く澄み渡り、沸あさやかに匂ひ深く、又は一條の霜白く冴えて、爽やかなる帽子先、眼もあやに、珠をも貫くべき風情、つくづく眺めて居給へば、刀上雲湧き潮亂れて、忽ち春の雪の烏毛にちらつき、又星影の水底にゆらぐが如きもの現れ來り霞み去り、生けるにひとしき有様は、もしくは神龍の化して成れるにはあらずやと怪しまるるまでの稀代の妙作、さすがに心を奪はれて言葉もなく茫然と醉心地にて居給ひしが、やがて右の手に持ち給ひしまゝ乗り出して、殿正藏、よくぞ作りし。美しさは十分の作なり。されど美し過ぎて覺束なし、切れ味はいかに」と云はるるや否、次の語を何出ださせ参らすべき、正藏、我を忘れ勃然と御縁の上に躍り上りて仁王立に突立ちはだかり、便々たる腹を丁と叩きて、「切れ、是を。確かに二つになつて見せん」

(一口劍)

これは最も東洋的な風格を持つ幸田露伴氏の作の一節で、その最後の部分である。豪快な描出を

味ふべきである。

### 俳句と和歌

又、正岡子規は俳句の革新に當つて、客観的な句風を指導し、その門から河東碧梧桐、高濱虚子氏等が出た。又、落合直文やその門の與謝野鐵幹、又佐佐木信綱氏等は、和歌の革新を志して、此の方は、むしろ浪漫的傾向が濃厚であつた。子規は、明治三十年代になつて、和歌の革新をも計り、萬葉調を稱へ、客観的、寫實的詠作を以つて、鐵幹の明星派と争つた。

此の鐵幹の弟子からは、石川啄木が現れて、深刻な人間苦を詠じ、三行に書く口語的發想で、特異な作品を發表した。その他、鐵幹の系統には、與謝野晶子氏、若山牧水、北原白秋氏の如き歌人が出で、子規の側からは、伊藤左千夫、長塚節、島木赤彦、齋藤茂吉氏などが出てゐる。

子規は又、寫生文を稱へて、文章にも新生面を開いた。此の系統を引く隨筆家に、寺田寅彦が出た。子規は又尊皇の志にも厚かつた人であることを忘れてはならない。



韓かんにしていかでか死なん我死なばをのこの歌ぞまた廢れなん

(鐵寬)

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひあふ人みなうつくしき

(晶子)

たはむれに母を背負ひてそのあまり軽きに泣きて三步あゆまず

(啄木)

ゆく秋の大和の國の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

(信綱)

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゞみの上にとゞかさりけり

(子規)

一輪の牡丹かゞやく病間かな

(子規)

これらの作品は、近代短歌の歴史の上では、既に一つの古典となつてゐる。

自然主義・人道主義・新理智派等

日露戦争後、物の眞實に徹しようとする痛切な要求が起り、此所に自然主義文學が小説の主流を占めるやうになつて、田山花袋、國木田獨步、島崎藤村氏の如き作家が活躍したが、やがてそのあつたものは頽廢墮落したので、代つて健全な人道主義を基調とする文學が發達し、武者小路實篤氏、志賀直哉氏等の白樺派が、大正時代の文學界の中心となつた。ついで、主題の理智的な解釋と、そ

の技巧的な處理を主とする芥川龍之介、菊池寛氏等の新思潮派が擡頭した。別に、泉鏡花、谷崎潤一郎氏、佐藤春夫氏の系列をなす浪漫主義唯美派の文學があつた。

又、自然主義の全盛時代から、絶えずこれに反對して、東洋的な藝術境に、豊かな智能を盛つた作品を出したのは夏目漱石で、『吾輩は猫である』『坊ちゃん』その他の傑作が多い。なほ、言文一致體の文學が、自然主義運動に伴つて發達し、甚だ流暢、自然なものとなつて、今日の普通文體の完成を見るに至つた事も注意すべきである。

親譲りの無鐵砲で、子供の時から損ばかりして居る。小學校に居る時分、學校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくらゐばつても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい、と囃したからである。小使に負ぶさつて歸つて來た時、おやちが大きな眼をして、二階ぐらゐから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから、此の次は抜かさずに飛んで見せますと答へた。(坊ちゃん)

戯曲

戯曲の方面では、早く福地櫻痴が市川團十郎と共同して寫實的意圖のもとに活歴を試みたが、失敗した。併し、爾後、舊い歌舞伎の型に新しい内容を盛らうとする傾向が現れて、逍遙や岡本綺堂の如き作家が出で、逍遙は又、新樂劇論を提唱して、歌舞伎の舞踊劇を改良しようとした。大正時代となつて、新劇運動が起り、小山内薫、木下杢太郎氏等が出で、白樺派の人々や倉田百三氏等も、新しい戯曲を作つたが、これは敢へて上演せられる事を企圖せず、讀まれる爲めの戯曲として創作せられたのである。かくて、此所に新しい文學型態を一つ加へる事となつた。

實朝 朝光。朝光。

ト呼ぶ、これにて朝光膝を進める。

朝光 はッ。

實朝 先刻も云うた通り、公家の古例がむづかしいので、伴れて行きたうても、伴れて行かれ

ぬ。おことも残念であらうが、予も何となう残り惜しいわい。何か其の代りにと、最前から思  
うてゐたが、ふと今、此の梅を見て一首浮んだ。これをおことに取らすぞ。

朝光 はッ。有難く存じ奉りまする。

ト雑色の方を顧みて

たそござる？ お視箱を。

ト云ふをとどめて

實朝 いや〜。筆には及ばぬ。これを。

ト梅の枝を渡す。朝光受け戴きて

朝光 はッ。

實朝 (中音に)出でていなば、主なき宿となりぬとも、軒端の梅よ、春を忘るな。

朝光 (同じく中音に)出でていなば、主なき宿となりぬとも、軒端の梅よ、春を忘るな。

ト繰返して了りて、覺えず傍らの廣元入道と顔を見合せて眉をひそめたが、やがて、  
かたじけなく頂戴仕りまする。

ト平伏する。これにて實朝は、一寸左右へ思入あつて、しづくと正門（花道）の方へと進む。（坪内逍遙、名残の星月夜第四幕第二場鎌倉御所中門庵）

昭和となつて、滿洲・支那兩事變により、文學の各方面にも、日本的なものが反省せられ、日本精神に富む作品が起つて來た。それとともに、科學的な知性に對する追求、新しい土の開拓を目標とする理想、さういふ冷徹と情熱、感性と悟性との交錯から統一への發展が、わが國家の一大飛躍に伴つて見られる事となつた。而して、最も大切な事は、大和民族の民族性を基調として、國民文學を發展させる要望の高まつた事で、ここに、今日の文學の礎が置かれなければならない。今日までの文學の最大の缺陷は、國家的關心の缺除にあつた。今や、明治維新後、始めて、國家を中心とする文學の時代に立ち至つた。その根本が定まつた上で、力強く今日の文學の前進が踏み出されなければならないのである。それは、世界を動かすに足る國體の眞髓から發した文學、勤皇志士の心をもつてする文學にまで到らなければならないであらう。今日は、その精神の涵養と將來の活動力を育てるところから、未來に發展する基礎を固め築き上げて行かなければならない。

## 結 語

以上で、長いわが國の文學の歴史を終つた。それは一面において、古典精神の歴史でもあつた筈である。われわれは、これらの過去の文學の中でも、特にすぐれた古典的文學の遺産を受け繼いで、この古典文學の傳統の上に立ち、より一層すぐれたものに發展させる事が大切である。又、それを單に知識として持つだけでなく、將來の生活において、生かして行く心がけが必要であると思ふ。かくて、わが國の文化が高いものに進歩して、世界を光被するに到り、從來の文學作品も亦、甚だ輝きを増して、世界の文化に貢獻する事が出来るやうになるであらう。私は、文學の方面においても、八紘爲宇の御精神の具現せられる事を深く希望したいと思ふのである。

第一章 國學に就いて

## 國學の意義

### 一

國學は天つ日嗣にまつろひまつる臣民の學問である。われわれ臣民を統治したまふ 至尊の御學問を皇學と申し上げるならば、われわれ國民の學ぶ學問は、實にこの國學でなければならない。上に皇學があり、下に國學があつて、わが國の學問は全いのである。

かくて、國學は、わが國民が天つ日嗣にまつろひまつる道を學ぶ學問であると云つてもよい。そもそも、まつりごとの意味は 天皇が、すべての臣民をまつろはせ給ふために執り行はせられる御政道を申すのである。まつりはまつろひと同義で、その臣民をまつろはせ給ふためには、神意をもきかせ給ふ必要がある。これ即ち、まつり（祭）である。かつて、伊弉諾尊、伊弉册尊が國うみしませし時、初めその生み出でさせ給うた御子が良しからずとして、神意を高天原にまします神に聞き受け給うた。かやうに、冥々にまします神意をたゞして、現つ御神が政治をおとりあそばすこと

を、まつりごとと申し上げるのであり、それゆゑ、顯幽一致して、ここにわが國家の政治の大本が築かれる。そのまつりごとが、臣民をまつろはしめ給ふ意義を含み、これを裏表にしては、臣民が天つ日嗣にまつろひまつる意義を持つものであるからには、このまつろひまつる日本國民の道を明かにする國學は、實に、政治の大本に關する、根本的な學問でなければならない。

このまつろひまつる道は、支那の儒教によつて定められたものではない。もとより、西洋の政治學によつて教へられたものでもない。これこそ、わが國の神代より自然に存在してゐた、天地神明と共にある道であつた。この道を明かにするためには、神代以來の上古の純粹なわが國の歴史と神話とを除いては、他に求めることが出来ない。これに加ふるに、萬葉集のごとき上古の純粹な文學精神をもつてすることが出来る。時代を下るに従つて、この純粹で逞ましい、まつろひの精神が衰へて來た。平安時代以後においては、遂に正しくおごそかなまつろひの道を求めるに難いのである。これはひとへに、外國の文化や精神の、悪い影響の結果であると考へられる。併し又、さういふ悪い影響を來たしたのは、その時の人々の心が衰へてゐたからであるともいふことが出来る。國民の精神力の弛緩と衰弱とが、實に平安時代以後、現代にいたるまで、一貫した歴史を形づくつてゐる

と、この一面からだけでも、歴史の理解を可能とするほどに、上古より下るに従つて、わが國民は心が衰へて來た。

たゞ、その中にあつて、國難に處する重大時局に際してのみ、國民の精神力は、上代の純粹で雄大な國家的精神に立ちもどる自覺をもたらしめたのである。それはまさに、優秀な大和民族の血潮が、隔世遺傳によつて、上代の祖先の魂にかへるものと云ふべきである。これを古代にしては、吉野時代の勤皇家の心がそれであつた。これを近代に求めては、幕末維新期の志士の魂がそれであつた。而して、現代のわが國の重大時局に際會して、わが國民の自覺が、更にこれを求める熱烈な求道心を起させたのである。

この上古の道を、今にして明かにするためには、上古を究明する學問が必要である。國學はかくして吉野時代に、その言葉の源を見出すことが出來、江戸時代に發達を見て、今日再び、その新しい要求が叫ばれるにいたつたのである。明治大正時代に、西洋の學問や文化の取り入れが、遂に非常に悪い影響を與へ悪い結果をもたらすやうになつた。これは、現代の國民の精神が衰弱してゐるからである。今や、これを健康な、わが國本來の國民の心に立ち返らさなければならぬ。そのた

めに、國學によつてわが國の本來のまつろひの道を明かにし、上古の心と魂を再び今日に生かさなければならぬのである。

## 二

國學を一つの體系ある組織に成立させ、一貫した理論の展開によつて、これに現代的意義を賦與しなければならぬといふ意見をしばしば聞く、この説は一應賛成であるが、併し私は、その體系とか組織とか理論とかいふものの性質に、非常な疑を抱いてゐる。今の知識人を満足させる體系とか組織とか理論とかいふのは、西洋の學問のそれであつて、西洋のすぐれた學者の示す尨大な體系、整然たる組織、緻密で透徹した理論、それに倣つて、國學にもこれを與へようといふ考へである。併し又一面において、わが國にはわが國における獨特の體系や組織や理論が行はれてゐた。それは必ずしも尨大ではなく、かつ甚だ茫漠たるものであつたかも知れないが、しかも國民の直觀に訴へて、その心底に明瞭な映像を焼きつけるものであつた。それは知識を満足させず理論を弄するやうなものではなかつたかも知れないが、しかも國民の精神と思想を根本から揺り動かすだけの力の籠つたものであつた。それゆゑに國學の發展が、驚異的な結果をもたらし、明治維新の大きい原動力

の一つにさへなつてゐるのである。

過去においてこれだけの實力をもつて發展して來た國學が、現代においても、その同じ態度と方法と理論とを押し進めることによつて、力強い存在とならぬ理由はない。當時と現代とでは一般の人々の教養が違ふといふのであるならば、われわれは、云ふ所の教養の性質について検討する必要があるのである。低い層では講談社本の教養、氣取つた都會の婦女子ならフランス文學と岩波文庫との教養、これらも教養と云はれるものである。現代の知識層の教養が現在の性質のまゝでは是認せられるものかどうか。つまり國學が現代人に迎へられるやうに作り上げられるよりも、それよりも前に、現代人の頭腦を、その精神を、心構へを改革する方が先決問題なのではないか。もしまつた西洋風の頭腦や魂に化さうとしてゐる現代の知識人にそれが望み得べくもないとするならば、現代の教養や文化を革新することによつて、その根本的な影響力の實現を、三十年、五十年の將來の子孫に期して俟つべきではないか。そのやうに考へた方が眞實の解決を望むことが出来る。たとへば、支那で抗日教育を受けて強烈な抗日意識に燃えてゐるものはもちろん、表面時代に順應してゐるがごとく見えて温順を裝うても根本の精神には、この抗日教育の影響を脱することの出来ない、

——さういふ多くの支那人に、わが日本の眞義をいくら説いてきかせても大した効果はない。精神の一大轉換が行はれて、日本にきくといふ態度を、心からとるやうな誠實さと謙虛さとを彼らが取戻して來ない限りは、わが日本の宣撫策も文化政策も、多くの効果は、現實には期待出來ない。併し、近い將來を目ざしての忍耐強い宣撫策や親日教育の効果が、その目的を徐々に達成せしめる時代の到來は、もとより大いに希望せられなければならない。恰度これと同じことで、現代の西洋風の學問精神に毒された知識人の多くは、抗日教育を受けた支那人に似てゐるのである。その學問や教養を正しいとするのは、支那人にとつて抗日の精神が正しいと吹き込まれてゐると同様であるから、いくら親日の態度が、アジアの平和と發展に、最も大切なものであるといふことを説き聞かせても理解が出來ず、さういふことを云つて、日本は支那に侵略的態度を取るのであると固執して動かす、歐米依存の態度に出ると同様に、わが國の古來の學問精神とか研究方法とかが理解出來ず、それよりは西洋の學問の體系や組織や理論がすぐれてゐるから、その方法によらなければ、國學も現代人には受け入れられないであらうといふやうなことも云はれるのである。

かやうな、近代の西洋の知識注入を基とした學校教育に毒されてゐる考へ方の上に立つて、いく

ら國學を論じ、國學を批判しても、それは決して國學の正當な理解に到達するものではない。第一に、西洋の學問は懷疑と批判の上に作り上げられたものである。さうして、それは常に客觀的な立場から對象に對するのである。従つて、研究者自身から云へば常に個人的な態度であり、對象に對しては、常に普遍的、超國家的効果を要求するのである。併し、國學はこれと對蹠的な性質を持つてゐる。それは懷疑ではなくて信仰に基づくものである。批判ではなくて體驗を重んじるのである。即ち、信仰と體驗は、國學の根本的な性質でなければならぬ。然るに、懷疑と批判なくしては、學問の成立と進歩とは困難であり、信仰と體驗の立場は、既に學問の領域を離れて、宗教と道德の境に入つてゐるものと考へる。これがそもそも西洋の學問に心を奪はれる證據であつて、懷疑と批判は、學問の發達に一つの寄與をなす手段とはなり得ても、それはもちろん終局の目的ではあり得ないし、又、この懷疑と批判とを、學問への重要な要素として、常にこれを反復繰り返してゐるうちに、遂に人間は、懷疑的な人物となり、批判のみを事とする學者にもなつてしまふのである。それが即ち今日の學校教育の成果であつたと云つてもよい。國學は、この低俗な懷疑と批判との境を突き抜けて、高い信仰と體驗の世界に到達せしめるものである。そこに初めて、學問がわが

生命と一體となつた歡喜と力が味ははれるのである。西洋の學問が單に頭の學問、肉體の學問に過ぎないならば、國學こそは魂の學問であり、精神の學問であるべきだ。

かくて、國學は必然的に行動的な性質を帯びる。傍觀的態度に出るのではなくして、必ずや行動する力の源泉が、その學問の中に潜んでゐる。それは爆發する地熱の力を思はしめるものがある。たゞ冷靜に客觀的に對象を見つめようといふのが西洋の學問であるならば、國學は對象と自己とが一體となるところから、これを行動に移す情熱を、湧き上る力を、學徒に要求するのである。このやうに、實踐性質を持つことは、あくまでも國學の本質でなければならぬ。

國學の中心は、わが國の道、神ながらの道におかれ、その研究の究局の目的は、このわが國の道を明かにするところにある。あらゆる研究の方法も、研究の部門も、結局は、この中心問題に聯關し、學者は愈々この切實の大問題を精神の中に籠めなければならぬ。それ故、國學の立場においては、決して個人的な研究態度を取ることが出來ず、それは常に國家的立場に立つて、わが國を主體とし、わが國を中心とする學問となるのである。

ここからして、西洋の學問に毒されたものは、かゝる國學の態度をもつて獨善的とか、排他的と



か、偏狭固陋とかいふ評言を加へる。併し、この評言はむしろ彼らの徒輩自身に與へられるべきもので、わが國家の大道を知らずして、いたづらに西洋の學問のみを高しとし、又貴しとするは、これほど獨善、排他、且つ偏狭固陋なるはない。わが國の大道を知らずして、どうしてよく外國の學問を學ぶことが出來ようか。國學は、この學問の根本精神を確立することを教へるのであつて、決していたづらに外國の學問や文化を排斥するものではなく、むしろ採長補短の方法は、國學では常に行つて來たところであり、知識を弘く世界に求める態度は、國學の發達の當初から取つて來た方針であつた。わが國を蔑視し、わが國以外の學問や文化をいたづらに讚美するのと、わが國を主體とし、わが國を中心として、わが國を高め尊むために、廣く内外古今にわたつて、これをきかうとする寛大な度量とは、いづれをもつて、獨善排他、偏狭固陋とすべきであらうか。もしそれ、超國家的普遍理念のみを學問の根本課題として、國家的立場を獨善排他、偏狭固陋とするのであるならば、その心身の衰弱してゐること、まさに、抗日教育を受けた支那人と同一で、西洋風の學校教育の害毒測り知るべからざるものがある。

但し、國學といへども、世界的な普遍的觀念を考へないわけではない。いなむしろ、それこそ國學の最大の目的と云つてよいであらう。併し、その世界的普遍的觀念といふのは、西洋精神の學者がいふ普遍的理念とは根本的に性質が違つてゐる。彼らの普遍的理念といふのは、あらゆる國家を無視して、人類相互の間に共通する思想をいふものやうである。國學における普遍的理念といふのは、日本を主體とし日本を中心とし、日本の文化の進歩發達に伴つて、日本の文化が世界に擴大普遍化するとき、それとともに、普遍化すべきことを本質とするものである。それは國家、特にわが日本の生命と結びついてゐる。悠久の太古より、無限の未來に續く、わが國の歴史と生命を共にするのが國學であり、國學の普遍化は、わが國の發展力に相伴ふものである。併し一面において、國學の精神的薰化影響が、又わが國の發展力を導くことも出来るし、國家と國學とは、全く一體となつて世界に進歩發展する生成力を持つものでなければならぬ。

## 三

江戸時代の國學にも發展があつた。國學の始祖は契沖であると考へられるが、その契沖に始まつて、春滿、眞淵、宣長を経て、篤胤にいたるまでにも、國學は内容的にも、外形上にも、大きい進歩發達が見られた。尤も、その根幹となるものは、上古の古典を通して、純粹のわが國の道を明か

にするといふ、國學の究局の目的と研究の方法とにおいて變化するところはなかつたが、併し、學問の方法や態度においても、その精神や、當面の目的とするところにおいても、種々の變化や差違が認められるのである。

それゆゑ、現在においても、江戸時代の國學そのまゝで今日に通用すると考へてゐるわけではない。併し、いかなる場合にも、元の歴史に溯上つて考へなければならぬのであつて、國學の大本は、江戸時代の國學者によつて定められてゐるのであるから、われわれはその態度を學び、その精神を生かすところから、上古の純粹の國家的精神に立ちかへり、それより再び今日の狀態を考へなければならぬのであつて、この順序を顛倒すると、現代の學者の所説に見られるやうな誤が生じる。それは、現代の精神をもつて、今日の狀態により、直ちに現實に適應する學問を求めこれを國學に希望するのである。

併しさういふ性急な要求からは、眞實の學問は生れて來ない。現代の學問の精神を、一度江戸時代の學者の精神に引き戻して見なければならぬ。引き戻すといふのが語弊があるなら、今日の西洋の學問によつて江戸時代の國學者の業績を批評しようとか、當時の社會狀勢と聯關して客觀的に

國學を考へて見ようとかする態度を、根本から拂拭して、當時の學者の精神や態度を學ぼうといふ虚心坦懐な謙仰な精神をもつて、これに向ふことが必要である。もし國學を今日に生かさんとするなら、今日の學者の、かゝる謙虛な態度がまづ欲求せられるのである。然るにこれに反して、當時は未だ學問が進んでをらず、まして西洋の科學や哲學や新しい文化は知られなかつたのであるから、これを消化してゐる今日の學者の方が、當時よりも學問的に進んでをり、頭腦も亦隔段の相違がある。それゆゑに、今日の進んだ頭腦と學問とをもつて、江戸時代の遅れた學問を考へ批判し、當時の國學者を冷靜に客觀的に視るところから新しい學問も起るべきであるといふやうな、思ひ上つた心をもつて國學に對するところからは、決して眞實の理解も信服も起らず、従つて、信仰と體驗と實踐の學問である國學を今日に生かすことは、たうてい不可能なのである。

江戸時代の國學者の精神がわからない以上は、又たうてい上古の純粹の國民精神、殊に、まつろひの道などが、明かに理解出来るものではない。それゆゑ、今日までの西洋の學問で毒された學者たちの上代研究に見られるやうな、西洋風の眼をもつて上古の姿を見た、種々の歴史的文化的哲學的剖判と解釋とが現れるやうな結果にもなつたのである。それは、現代人の西洋風の心をもつて

一足飛びに上古の純粹の心に對したからの誤であつて、この順序は、一應われわれが、現代の學校教育で毒された西洋風の心を、江戸時代の國學者の精神や態度を學び、これを敬仰することによつて、國學者の精神や態度に立ちかへり、この國學者としての眼と心をもつて、上古に立ち向ふといふことにならなければならないのである。これだけの手續きを踏まない研究は、遂に何らの加ふるところもない。

國學自身、この謙仰の心を底において成り立つてゐるのであつて、かやうな謙仰な心があればこそ、上古の道に對して、己を空しうしてこれを踏み行はうとする信仰と實踐的態度を持つことも出來たのである。それゆゑ、國學に就かんとするものは、この謙虚な心を養はなければならない。國學が廣く外國の學問や文化に對して學ぶところがあらうとするのも、この謙虚な心に出でてゐる。

併し、誤まらねならないことは、この謙虚は決して卑屈ではないといふことである。そこに、國學の外國の學問や文化に對する態度が、西洋の學問に心酔する學者の奴隸的な隷屬の態度と異なるものが見られる所以である。國學は、この點において、謙虚なる心を持つ一面において、又非常なる自信を抱いてゐるのである。謙虚と自信とは矛盾するものではない。謙虚と自信とが一枚の裏

表となつてゐるところに、その價值が認められる。自信によつて裏づけられない謙虚は最早謙虚でなくて卑屈、醜陋であり、謙虚を伴はない自信は、むしろ厭ふべき傲慢、不遜となる。國學は決してさういふ卑屈でもなければ、傲慢不遜なるものであつてはならない。

かくて國學は滿々たる自信に滿ちた學問である。それはわが國家を主とすることにおいて、滿々たる自信を持つ。わが國の道が萬邦に卓越してゐることにおいて、滿々たる自信を持つ。道を具體化してゐる歴史と文化の優秀さにおいて滿々たる自信を持つ。西洋の學問に捉はれた學者のやうに、無差別に、乃至は西洋を過大過重視する態度のもとに、西洋の學問の影響を受け、西洋の文化を取り入れることをしない。そこには國學の自信に基づく十分の辨別力をもつて、西洋の學問や文化に對するのである。かやうな場合においてこそ、國學の批判力は發揮せられるのであつて、國學が現代に生かされる道には、この自信の力を養はしめることがあげられなければならない。かやうな自信のある態度をもつて、固陋とし排他的とするものがあるならば、論者の心は、遂に救ひがたいまでに西洋風の精神に害されてゐる。

われわれは、新しい論理を必要としてゐる。それは、西洋の學問でいふ論理ではなくして、東洋

風の論理、直観と感覺で行はれる論理である。そこで新しい學問が、その組織と體系とを備へて來るであらう。それは決して、西洋の學問のやうな組織と體系とを意味するものであつてはならない。さうして、國學は、まさにその性質を持つものでなければならぬのである。

國學の現代的意義を説き、その現代的生命を論じることが容易である。併し百の論議も遂に一の體驗と實踐にしかない。國學は、いたづらなる言學を嫌ふものである。無意味な議論を弄するよりは、沈黙のうちに、古人の心理に沈潜するの深さにしかざるべきである。國學を現代に生かす道は、決して、國學を現代の知識人の氣に入るやうに整理し直すことではない。反對に、國學によつて現代の危極に處する救ひとすることが、その重要な意義でなければならぬ。國學をもつて非科學的、非論理的とする現代の學者や知識人に對して、その科學の意味、論理の性質が、根本から更新せられる曉こそ、初めて、國學の巨大な英姿が、現代に顯現するときであることを知らしめるべきである。それまでは世の本末顛倒した議論、いたづらな言學、乃至は言さやぐ唐さへづりに拘はることなく、むしろ、信仰と實踐のうちに、國學の體驗をみづから收得して、その生命に觸れるべきことを、弘く心ある人々に求めるのである。これこそ國學を現代に生かす根本の、又殆ど唯一の道である。

## 國學の精神

國學の精神は、一口にいふと、道を明かにし、かつこれを實踐するといふことにつきる。道を明かにすることが國學の學問であり、同時に又かくて明かにせられた道を實踐するといふことは國學の教なのである。大國隆正といふ篤胤門の學者は、この教を本教といひ、この學問を本學と云つてゐる。つまり本學、本教が一つに統べられたもの、即ち國學である。今日、教學といふことがやましく云はれるが、教と學との一致したものが、國學において見られるわけである。

國學でいふ道とは一體何であらう。これはわが國の道であり、國家の歴史とともに永續する道である。それは天照大神によつて示し給うた道であり、又、代々の天皇の大御心によつて受け傳へ給うた道である。それゆゑ、われわれは、神勅及び御歴代の詔勅や御製によつて、道の存在を拜承することが出来る。次に、上古の古典によつて、道の眞實に行はれた有様を知ることが出来る、そこから又、道とはいかなるものであるかを歸納することも出来る。

物ごとは、根元に遡るほど純粹で、眞實の相を保つてゐるものである。國學が上古の古典を、道を知る上の經典としてゐるのも、そこにわが國の眞姿を認めることが出來、後代の濁れる心を、それによつて清め祓ふことが出来るからである。このやうにして、國學は自然に復古主義の性質を帯びる。

何故に後代になれば、穢れ濁るのであるかといふと、それは、種々の外來の思想が、國民の心に喰ひ入つて、その本來の心をも歪め曲げるやうになるからである。恰度、子供の純眞なひたむきな魂が成長するにつれて、世間のさまざまの知識や經驗から、狡猾になつたり、卑屈になつたり、一口に云へば、不純な人間になることが多いのと同じである。その際、子供の純粹な感情、ひたむきな熱情といふものに、何人も、強い感動を覚えることであらう。それによつて、われわれも、もう一度子供の魂を取り戻したいと願ふ。さういふ心持から、古への純粹な姿を振り返つて見ようとするのである。

人は云ふかも知れない。併し、國家がいつまでも、そのやうな子供であつては仕方がないではないか。列國の競争においても直ちに負けてしまふであらう。恰度大人と子供との角力が勝負にもならないと同様に。併し、もとよりこれは一つの譬喩である。この譬喩の場合にも、なる程、大人と子供では角力にならないであらう。併し、大人と子供とが立ち向つたとき、子供の純眞な魂に大人が感じて、心が打たれることも少くない。これは力の上では問題にはならなくても、心の上では、明かに子供の勝である場合も少くない。まして國家においては、現代を、いかに古へに返さうとしても、それは到底不可能なことは勿論である。

大人が子供の心に感動を受けるのは、それによつて、自分の濁つた心を反省して、純眞、誠實な人間にならうがためである。さうしてせめては、その世間なれた厚顔や無恥を、悔い改めたいためである。國學における復古の精神も亦これと同一であつて、本來の日本的な國民の魂が汚され、失はれようとしてゐるとき、その根本に立ち返つて、眞實の國民的な心を取り戻さうがためである。つまり、大人が、そのすぐれた智能を持ちながらも、なほ魂において、子供の清純さを失はないとき、一層その存在は力強いものとなり、人を感動させることも深いものとなるであらう。國學はこの國家の發展の中に、古代の清純な生命を注入することによつて、腐敗墮落への道を防がうとするのである。

かくて、國學における道の精神は、わが國が、肇國の古へから、皇祖皇宗によつて、與へ給うてゐた道であつて、子孫臣民が共にこれを順奉しなければならぬものとするのである。それ故、わが國の道は、わが國家を形成する君臣の道であり、わが國のみに具はつてゐる道である。この道は、わが國のみが持つ特殊にして高貴な本質でなければならぬ。

併し、それが尊むべきものであればあるほど、それをわが國のみの存在とするには忍びないであらう。わが國の君民一致階和する高く美しい、この道を、世界萬國に敷き及ぼすことによつて、世界人類に偉大なる寄與をしたいと願望するやうになるのは、自然の心持である。わが國の持つこの卓越した道の精神は、かくて世界萬邦に普遍すべき道でなければならぬ。ここに、道の普遍性といふことが考へられて来る。それは又、このやうにも考へることが出来る。道は天照大神によつて教へ給うたものである。天照大神はわが國の皇祖神であらせられると同時に、又元來は、世界萬邦をもみそなはせられ光被せられ作り出でさせられた御神である。その萬國の中で最も愛子として、いつくしませ給ひ、最も高き尊き道を傳へさせ給うたのが、即ちわが國であるから、わが國は世界の根本であり、中心であり、世界各國の長兄であり親國であるはずである。それ故、他國では傳へ

られず、又は忘れられて、わが國のみに傳へられたこの道は、同時に又、世界萬邦にも教へ弘めるべき普遍性を持つものでなければならぬ。このやうにして、わが國の持つ道を明かにするとともに、これを世界に普遍させることは、國學の理想である。

以上のやうに、國學は、道の闡明と、その普遍化といふ二つの面を持つてゐる。それと同時に、道の闡明をするために古典の研究が行はれ、又道の實踐のためには、宗教、藝術の道が、別に開かれてゐる。

古典の研究については、これを言葉を調べる言語の學問と、事がらを調べる有職故實（法律などもこの中に入る）の學問と、更に、事件を調べる歴史の學問と、この三つが、國學では考へられてゐる。言葉と、種々の事物とそれから、動く歴史と、この三つの方面から道を明かにして行かうといふのである。併し、有職故實や歴史の學問にしても、その文獻の意味を明かにするためには、言葉の意味が明かとならなければならぬから、結局、言語の學問が根本で、その上に靜的な事がらを調べる有職故實の學問が立ち、又、動的な歴史の學問となるのではないかと考へられるが、これは、學問の順序段階の問題で、そのいづれが重要で價值があるといふ差等の問題ではない。

これは學問の方面の事であるが、その實踐の面としては、宗教的性質を帯びる神道と藝術の方面では歌道があげられる。神道と歌道とによつて、國學はその實踐的な性質が發揮出來るとともに、その普遍化も、この方面から可能となつて來る。上代精神の發揮もこれによつて可能である。

國學をもつて、排他的獨善的といふのは、非常な誤であること、以上説くところによつて明かであらうが、なほこの點について説明を加へると、國學が道を明かにし、これを信奉することを、すべての國民に求めるのは、それが、わが國民の當然踏み行ひ、又必ず踏み行はなければならぬ道であるからであるが、この道を信奉するときに、始めて、大和魂を固めることが出來たといふ精神の自覺を得るのである。この大和魂さへ固く持つことが出來たなら、その上では外來のすぐれた文化の長所を吸収するのに、何の憚かるところもない。むしろかくて、わが國の發展は、この同化融合の上に築かれてゆくのである。たゞ上古においては明かであつた道の精神も、後代には黒く濁らされて來た。さういふ時代に、外國の知識や文化を取り入れたのでは、その是非善惡を判別すべき批判の基準も定まらなくて、いよいよその溷濁と汚穢は増し加はるのみである。それゆゑまづ批評の根本である道を明かにし、この道を體得し、把握して一つの信念に到達したと自覺するとき、始めて

大和魂を取りもどしてもろもろの後世心を拂拭することの出來た、上古の清明心に立ち返るのである。この心をもつて、外來の文化に對するならば、最早その害毒を受ける惧れもなく、十分にわが國の文化に貢獻することが出來るのである。國學は、かういふ學問の方法をも教へてゐる。

最後に國學が現代において新しい生命を持ち世界的普遍性を備へるためには、その學問の分野において、自然科学の取り入れが考へられ、哲學的な思索の効果も考へられ、又藝術の方面においては歌道のみではなく、あらゆる文藝や、繪畫のごとき美術なども取り扱はれることが考へられて來なければならぬことを附け添へておく。もとよりその間に、主となるものと従となるもの、中心となるものと然らざるものとの區別は、おのづからにして明かであらう。

## 國學の道統

重大な、國家の危難に面する時、わが國はいつも、その危難を切り抜けるために、或は、國家の一層の發展のために、自己の位置、立場を自覺し、さうして相手にぶつかつて行かうといふ勇猛心を振ひ立たせてゐる。大體日本人は、理性的であるよりも感情的國民であると云はれてゐるが、もとよりそれは理性を全然缺いてゐるといふのではなく、相當の理性をそなへてゐても、結局感情の方が先きに立つのである。併し、此の純粹の感情といふものは甚だ貴いもので、それが日本人の美點でもあるのであらう。此の感情の凝る時、一大勇猛心となるのである。日本人は死を恐れないといふ。實際日本人はよく死にたがる。さういふのが悪ければ、あへて自ら進んで死地に赴く。これは理性ばかりでは出来ないことで、日本人の純粹の感情がさうさせるわけである。死を輕んずるが故に、一死君國に報ずるなどといふ事も出来るのである。

此の精神を、維新時代の勤皇家はよく歌つてゐる。例へば佐久間東雄といふ人、此の人は世間に

あまり知られてゐないが、大阪に住んでゐて、櫻田の變の同志の大阪に逃げて來たのをかくまつたといふ嫌疑で捕へられ、獄中に死んだ人であるが、此の人の歌には、

命だに惜しからなくに惜しむべきものあらめやは皇がためには  
とか、

君のため命死ぬべき心なき人のするわざはかなかりけり

とか、又櫻の散るのを見てよんだ、

事しあらばわが大君の大御ため人もかくこそ散るべかりけり

などといふ、報國の精神を歌つた作が多く見られる。

維新の志士がどうしてかういふ精神を起して來たかといふと、それは國學の發達による所が多いのである。

長い間、國民的な精神ののびることをおさへつけ、たゞあり來りの因襲を強ひて、文學でも從來傳へられてゐた形式だけを守り、かういふやうに物ごととは解釋するものだ、歌はかやうに作れただ強ひられてゐた時代に、古典を眞に味讀して、そこから純粹に日本の精神、文化をつかみ出さうと



いふ心持が起つて來た。これが國民の自覺の第一の階段で、大阪の契沖が、さういふ自覺の先覺者である。ついで契沖の書いたものを讀んで大變に感心した京都の荷田春滿といふ神官が、わが國では支那の學問ばかりやつてゐるが、わが國自身を研究する學問がないのは怪しからん、當時昌平費といふやうな漢學の學校は諸國にも出來てゐたが、自分の國の學問をする所がない、それで、漢學に對して國學を起せといふので、わが國の古典などを研究する國學校といふのを作らうとして、幕府にも運動したらしいのだが、途中で死んで、此の運動は遂に失敗に終つた。併し、此所で國學といふ言葉が始めて弘く世に使はれるやうになり、此の言葉で日本の自覺した精神を表現するやうになつたのである。尤も國學といふ語は上古にもあるが、それは中央に大學を置くのに對し、地方の學校を國學と云つたもので、即ち、地方の國々の學校といふ意味であるから、わが國のことを研究する學問といふ、今の意味とは大變に相違してゐるのである。

此の春滿に教を受けたのが濱松の賀茂眞淵で、元來は本陣宿の主人だつたのだが、學問が好きで、妻の勧めで、京都に出て春滿について勉強した。あとは妻が留守をあづかつて宿を經營してゐたから、なか／＼えらい婦人である。眞淵は後に江戸に出て、將軍の子である田安宗武の先生とな

り、多くの門人が出來て、今までは、あまり勢力もなく、漢學に壓倒せられてゐた國學の位置を、漢學に對抗出来るほどに高めた。さうして古典の研究はますます進むとともに、國家に對する認識は深まり、國體に對する理解の増加は、古代の宗教に對する信念、即ち、神道的觀念を發達させて來た。此所に至つて、その自覺は一層強固な地盤を得て來たのである。

眞淵に啓發されて、その門に入つたのが、伊勢松坂の本居宣長翁である。此の宣長翁は、名古屋と大變關係の深い人で、尾州家の藩士にも弟子が多かつたが、又、宣長翁の著書は大體此の名古屋の書肆である永樂屋、片野東四郎から出てゐるし、その出版費用は、尾州家の家臣の横井千秋などが出したのであつた。

此所で注意したいことは、宣長先生と云ふと、何か塾でも開いて講義をしてゐた學校の先生などのやうに思はれるであらうが、決してさうではない、宣長翁の本職は小兒科の醫者である。さうして傍ら町の人々を集めて古典の講義をしてゐたので、講義の途中でも、人が呼びに來ると、直ぐに往診に出かけ、又歸つて來て、待たせてあつた人々に講義を續けると云つた工合である。かやうに、町醫師としての職業に勵みながら、宣長先生は古典を研究し、さうしてあれだけの精神的自覺

を確立したのであつて、此の點は、日本の自覺といふことが、色々の主義を立ててそれを職業的にやつてゐるのと違ひ、普通の職業に従事し生活してゐる人々の間から起らなければならぬといふ事を教へてゐる大切な點である。

此の宣長先生が國家的觀念の自覺を促し、古事記の如き古典を研究して世に弘められた功績は甚大なものがある。そこで、直毘靈といふ文章では、かういふことを云つてゐる。わが國では昔から外國にいふやうな道、これは道理即ち理論といふほどの意味であるが、さういふ理論をことごとく立立てるやうなことはなく、ただ 天皇の大御心を自分の心として、ひたすらに勅命をかしこみ敬ひ 天皇の御蔭を蒙り、その御いつくしみを受けて、各々祖先を祭り、自己に與へられた天職、天分のほどくについて、その業を勵み行ひ、おだやかに楽しく世を過すより他はなかつたから、別に道といふやうなものは存在しなかつたのだといふ意味のことを述べてゐるが、此の自然的な平凡ではあるが、堅い信念に根ざした峻烈な意見は、後の國民の道義の根本思想を形作る事となつたさうして、此の思想から發展して 天皇を仰ぎまつる勤皇の精神が起り、討幕運動が展開されることとなつたのである。

それらの人々は多かれ少かれ、宣長の影響を受けてゐる。さうして、一方では實行運動をしなから、一方では歌を絶たなかつた人が多いのである。平野國臣といふ人は福岡の藩士であるが、京都で勤皇運動をしてゐるうち、藩論ががらりと變つてしまつて佐幕論となつたために捕へられて獄屋につながれ、三年間、獄中を轉々として遂に殺されたのだが、その間に作つた獄中の歌には、悲壯なものがある、

わが心岩木ならねば世のために捨てし妻子を思ひこそやれ

世のために捨ておきしかど年へても忘れぬものはわが子なりけり

と妻子の身の上を案じながらも亦強く、

けふかゝる身となるまでもつくしてぞ益良男子のかひはあるべき

よみがへり消えかへりてもつくさばや七たび八たび大和魂

と、七生報國の決意を叫んでゐるのである。

此の國臣と親交があつて、これを保護したのが同じ福岡の野村望東尼で、歌人としても立派な女流歌人である。

かういふ人々が續々として出たので、國學精神は實行的な効果を生み出した。此の實踐と學問研究の精神との結合が貴い所である。眞實の學問は、かういふ實踐的情熱をひそめてゐて、いつかそれを發展させるものであると思ふ。新しい國學の精神も亦、かうした意味で確立され、發展することを、私は期待してゐるのである。

## 學問の呼稱

古來、わが國の學問に對して、學者が、どういふ呼び名を用ひてゐたかを調べて見て、それにより、學者が、わが國の學問について、どういふ意識を持つてゐたか、また、どういふ見解を抱いてゐたか、その目的や精神を明かにしたいといふのが、わたくしの目的である。なほ、以下に引用する諸家の論は、長文にわたるため、その大意を、わたくしにかいつまんで述べることにしたから、意をつくさない點もあると思ふが、その點は諒承を願つて、詳しくは、原本を見ていただくことにしたいと思ふ。

わが國で、古くから用ひなれてゐて、最も一般的であつた呼稱は、和學（又は倭學）と、それに國學といふ二つである。

和學と明記した例については、江戸時代以前には、まだ明かでない。村田春海は、和學大概といふ書で、堀河天皇の御時に、大江匡房が、和學得業生問答といふものを記してゐるので、その頃か

ら、和學といふ名目があると云つてゐるのは誤りであつて、これは、本朝續文粹の卷三に、和歌博士紀朝臣貫成といふ者と、和歌得業生の花園朝臣赤恒といふ者が、和歌について問答した對策の文章を、大江匡房が書いたのを載せてゐるが、それには、和歌得業生とあるのを、村田春海は思ひ誤まつたものらしい。和歌得業生といふのは、文章得業生といふ名稱があるのに對して、戯れにかういふことを云つたもので、大江匡房以前では、藤原公任が、その撰に成る金玉集に、倭歌得業生柿本末成撰と署名したやうな例もあるが、それに倣つて、匡房も戯れに、さう記したものであることは、人名を見ても明かであらう。それで、和歌得業生といふ名稱を用ひたことは古くはその例がないのである。

かやうに、この點は、村田春海の思ひ違ひと思ふが、その和學大概の中では、林春齋が塾生を教へるのに、五科をたてて、その中に和學科があることを注意してゐる。それは、林春齋の鶯峯文集に、經科、史科、倭學科などの稱が見えてゐることであるが、多分、これらが、その古い用例ではないかと思はれる。

長谷川昭道の三餘叢談といふ隨筆には、朝野群載九卷の、大江朝綱が書いた、爵を以て親父に讓

る申文の中に、親父忠行は古今を尊ね學は倭唐を兼ねとあるのが、倭學といふ字の出所だとしてゐるが、この同じ説は、小山田與清の松屋筆記にも見えるところである。但し、松屋筆記では、この大江朝綱が賀茂保憲のために書いた申文を、源順が藤原明子のために書いた申文の中にある文句のやうに誤つてゐるが、この二つの申文は、朝野群載九卷の中には、並んで出てゐるので、與清は、ふと間違つたものと思はれる。これは、長谷川昭道の引用の方が正しい。

かやうに、この文章を、學者は注意してゐるが、併しこれは、學は倭唐を兼ねとあるのみで、まだ和學といふ呼稱の成立を見たものといふわけには行かない。とにかく、漢詩、唐詩に對して和歌、漢文に對して和文があるやうに、唐學に對して和學といふ觀念が古くからあつたことは當然であらう。

これらの例でもわかるやうに、和學とは、元來、漢學者が、漢學と區別するために、わが國の學問を和學と稱したものである、それで、篠崎東海は、和學辨で、かういふ意味のことを云つてゐる。

和學といふ名目は不當な名稱である。わが國のことを研究する學問を和學といふのは、わが國を

重んずる意味から云へば、不相應な名目である。わが國の人が、わが國の事を研究するのを和學といふと、唐よりも下になる。漢には漢學の名目がなく、唐には唐學の名目がなく、朝鮮には朝鮮學の名目がなく。唐や朝鮮に和學の名目があるのは、かの國にて、わが日本の事を學ぶ事をいふのである。それで、かの國に和學者の名目があるのは道理に叶ふ名目であるが、わが日本に和學の名目があるのは、拙いことであつて、かういふ誤があるのは、わが國の國體についてよく知らないので、氣がつかないからである。

かやうに論じてゐるのは、正しい批評と思はれる。村田春海の和學大概に比べると、この篠崎東海の和學辨は、一段と進んだ思想であると思ふが、しかも、篠崎東海は漢學者であつて、一方、國學にも理解のあつた學者である。

國學といふ呼稱は、上代の國學は、意味が別であるから除くとして、今、用ひてゐる意味に近い用例としては、元享釋書卷十、釋增命の項に、「あゝ梵學猶彼のごとし、況んや國學をや。國學は藝術也、況んや廟堂をや」とあるのが、古いものとせられてゐる。この用例においても、梵學に對して國學と云つてゐるのであるから、漢學に對して和學と稱したのと同様の相對的な名稱として用ひ

られたものといふことも出來よう。それで、本居宣長は、うひ山ぶみの中で、かういふことを云つてゐる。

昔からたゞ學問と云へば漢學を云つて、わが國の學問をば、和學とか國學とかいふのは、大へんわるいことである。反對に、わが國の學問をば、たゞ學問と云つて、漢學を、これと區別して漢學といふべきである。併し、もし漢學と紛れるやうなら皇朝學などといへばよい。とにかく、たゞ和學、國學と云つては、わが國を外にした云ひ方となつて、面白くない。外國からわが國の學問をさういふのはよいが、わが國の人が、みづからさういふのはいはれないことである。

かやうに論じてゐるのは、前に述べた篠崎東海の意見とともに、味ふべき説であると思ふ。これと同じ意見は、橘守部の稜威雄詰といふ書などにも見えてゐる。

なほ、この國學に當る呼稱を、國の代りに邦といふ字を使つて、邦學と云つた例もある。荷田在滿の墓碑銘には、春滿、邦學を以つて名ありなど見えてゐるが、あまり見かけない云ひ方のやうだ。

以上のやうに、これらの呼稱は、漢學者や僧侶の間から用ひ出されたものやうであるから、相

當古くから用ひられてはゐたが、近世にいたり、古代の研究をする學問が勃興するやうになつて、これらの呼稱を飽き足らないとするやうな考がおこり、あらたに、それらとは別の呼稱を考へるやうにもなつたのである。それで、宣長や東海のやうに、明かに、これらを否定する學者も出てゐる。

古學といふ語は、荷田春滿の創學校啓の草稿本と稱せられるものの中には、度々用ひられてゐるが、更に、この啓文の中には、復古の學とも稱し、又、皇國の學といふ語も、創學校啓の刊本に出てゐる。かやうに、種々の語の使用が、その志す、わが國の學問の意義を、どのやうに表現しようかと、動搖してゐる、近世國學の勃興期の状態を、そのままに現してゐるやうに思はれるが、ここで古學といふ語も用ひられるやうになつた。

この語は、平田篤胤などにいたるまで、近世國學者の間でも、多く用ひられてゐるが、併しこれはわが國ばかりではなく、漢學の間でも用ひられ、支那にも用ひならされてゐる言葉である。それで、平田篤胤は、古學といふ他に、古道學とも云つてゐる。古道大意に「此方の學風を古學と云ひ、學ぶ道を古道と申す故は、古へ儒佛の道いまだ御國へ渡り來らざる以前の、純粹なる古への

意、古への言を以て、天地の初めよりの事實を、すなほに説き考へ、その事實の上に、眞の具はつてある事を明らむる學問である故に、古道學と申すでござる」と云ひ、又、玉だすきでも「古道學を興すを經國の大業と稱せるなど」とも云つて居るのである。

本居宣長は、前にも云つたやうに、皇朝學といふ呼稱を使つた。うひ山ぶみに、「皇朝學などはいひもすべきを」と見えてゐるし、又、宣長翁の書簡の中には、皇朝學といふ言葉が、たびたび使つてゐる。これは、宣長翁の師なる眞淵翁が、その書簡の中などで、皇朝の學といふ語を用ひてをり、宣長宛の書簡などでも、この語が見えるので、それを簡略にして、皇朝學と稱したものであらう。例へば、眞淵の明和二年十二月廿一日付の宣長宛書簡に「皇朝之學は、古詠を自ら不<sub>レ</sub>得候て、理屈にのみ落る也。」同じく明和六年五月九日付の宣長宛書簡にも「いまだ皇朝之學のみ漸ひらけかゝり候へば、此上天下に鳴べきは是也」などと見えるが、宣長翁が寛政八年七月廿六日に、荒木田久老に宛てた書簡には、「惣體當時は、何方共、皇朝學詠歌はやり申候様子ニ而、扱々悦敷御事に奉<sub>レ</sub>存候」と見えるのである。なほ、眞淵は、その著の延喜式祝詞解の序によると、「予が先師荷田大人は、國朝の學の大家にして」ともあつて、國朝の學といふ語をも用ひてゐる。

尤も、皇朝とか國朝とかいふ語は、支那でも多く用ひられてゐて、特別にわが國で使はれ出した言葉といふわけではないから、支那のそれと混じる恐れがあつて、この點は考慮すべき餘地があらうと思ふ。

次に、注意したいのは、河村益根の説で、この人の書いた文書の中には、紀典學といふ呼稱を立ててゐるのである。河村益根の主張によると、自國の學問を和學と唱へるのは、漢學に對していふことであるが、すべて、和とか日本とか扶桑とかいふことは、容易にいふべき言葉ではない。和學といふ名稱も、世間に廣く流布してゐるが、心得た人は云はないことである。それで、自分の家では、和學の事を紀典學といふのである、といふ意味のことを説いてゐる。これによると、紀典學といふのは、和學といふのと同じ意味で、その紀典學の紀は六國史のこと、典は、古事記以下の十二部の古典をいふもので、この紀六部、典十二部を學ぶことが、わが國の學問に通じる基礎だとしてゐるのである。かやうに、紀典學といふ呼稱は、古代の文獻を土臺にしたもので、近代の文獻學などといふ呼稱にも通じるものがあるかと思はれる。なほ、紀傳學とも書いた本があつて、紀傳學一家言と題する書には、「天地大略神隨ノ神明ノ道、皇國ノ本教ニテ我家ノ紀傳學ノ要領

一言ニテ道ヲ知ルトイフハ此君臣ノ道ナリ」と書いてあるが、これは、日本書紀傳を著した、鈴木重胤などと關係あるものかも知れないが、紀典學と似てをゐるので、かういふ呼稱のあることも申してそへておく。

水戸學派の吉田活堂らは、皇國學といふ言葉をを用ひてゐる。これは音で皇國學とも云つたのであらうが、又、大和言葉で、みくにまなびとも云つたのである。その著した聲文私言の中には、かういふことを云つてゐる。

萬葉や源氏などの一部分を見た人を國學者とか和學者とかいふのは、この道の弊である。それらの類は、たゞ考證の學をやつてゐるだけのこと、皇國學の師とは云はれない。眞實の皇國學とは、わが國の神ながらの道をよく考へ明らかにした人を國學者といふのである。

かういふことを云つてゐるが、味ふべき言葉である。この他、宇麻志美道といふ著書の中にも「皇國學の輩はいふもさらなり。漢學の徒も、まづ我が國體を知るべきわざを要とすべし。……或は歌よみの先生、或は皇國學の大人など、其名いかめしく世にとゞろくも、賀茂眞淵、本居宣長、村田春海などのほかは、國體を知れるは、いとまれなり」と云ひ、又「皇國學は我大和魂を磨みがに

あり」とも見えてゐる。この皇國學の文字は、平田篤胤の玉だすきの中にも、「また古くも、皇國學の學の無りし事をも慨け啓して」などと使つてゐるが、これをみくにまなびと訓讀することについては、吉田活堂が宇麻志美道で「學としいへば、皇國の道を羽翼べき學なりしを、大和魂を失ひたる世となりてぞ、皇國學といふ名は出來たりける」と云ひ、その皇國學といふ漢字に、みくにまなびと振假名をつけてゐるのでも明かであるし、又、平田篤胤も玉だすきで、「拙者がみくにと申したらば、此の皇國のことちやと心得さへすれば宜しいで御座る」と云つてゐるのにより、皇國の學が即ち、みくにまなびであるわけである。

なほ、吉田活堂の考では、學問は當然わが國の學問であり、特に皇國學といふべき筋合でなく、それを皇國學と云はなければならぬのは、大和魂を失つた世の中になつたからであると云ふわけで、又、別に平田篤胤は、玉だすきの中で「また世間の人の常に云ふ言に、日本ではどうしてかうして、或は日本人がどうしたかうしたの、といふことを申すが、さう云ふべきものではない」とも云つてゐるが、これら、前にも述べた宣長や東海、守部、益根などの説が、すべて一定した精神をもつて表現せられてゐることを注意すべきで、ここから、學問の呼稱をも、いかにいふべきかが考

へられてゐるわけである。

更に、幕末には、本學、皇學といふ呼稱が用ひられた。

本學といふ呼稱は、大國隆正が本學學要の中で主張するところである。隆正は、本學といふことを説き、その本學といふ名目は、自分があらたにつけたのではなく、古事記の奏上の序に見える語で、故太素冥因<sup>カレ</sup>本教<sup>カレ</sup>而識<sup>カレ</sup>孕<sup>カレ</sup>土產<sup>カレ</sup>島<sup>カレ</sup>之時<sup>カレ</sup>とある本教の二字がこれである。その本教の旨を學び知る學術が即ち本學であるといふのであるから、古學のことをいふ呼稱である。同じ隆正が、嬰々筆語の中で云つてゐるやうに、「世に和學者、國學者などいへど、あたれる名稱にあらず。よそにてはいかにもいへ、みづからは本教本學といふべきなり」といふ精神で、國學、和學のことを本學と稱したのである。

この本教とか本學とかいふ呼稱は可成り廣く用ひられたやうで、名家年表によると、萩原廣道にも本學提綱といふ著書があり、長野縣下伊那郡山吹村には、國學の四大人を祀つた本學神社といふ神社も出來てゐるのである。本教といふ言葉にいたつては一層廣く、又、古くからも用ひられて來た言葉のやうで、荷田春滿なども既に使つてゐるが、これについては、今は詳しくは述べな



皇學といふ呼稱については、明治元年、岩倉具視に上書せられた長谷川昭道の皇學意見に詳しく見えてゐるが、それによると、皇學といふのは、帝王の學とも申すべき學問で、世界を統括する學問であり、士君子がその職分の當然をつくすためにも、是非これを修め學んで、大政を扶翼し奉らなければならぬのである。その學問といふのは、世界中のあらゆる學問を取りをさめ、又、文學、史學の類の他、天文學、地理學から兵學、理學の類まで、あらゆる學問を入れてゐるのであるから、今日の綜合大學の内容にあたるものである。さうして、「何卒大に皇學を御振興在らせられ、大に天下の人士を御教導在らせられ度御養と深く奉至願候」とも希望してゐるのであるが、その結果、皇學所といふものも設けられる運びになつたので、慶應四年五月に草した皇學所御規則といふ書は、右の皇學意見の趣旨のもとに、學校の内容を規定したもので、その皇學所では、本教學、經濟學、辭章學、藝伎學の四つの分科に分れ、その各が、又、種々の科目に細分せられてゐるが、この方は、皇學意見に見えるほどの廣汎なものではない。

かやうに、長谷川昭道の皇學は、わが國家に吸収せられたあらゆる學問を總稱するもので、國學、和學といふやうに、一つに偏つたものではないが、又別に、國學の意味でも用ひられてゐたやうである。松平春嶽の雨窓閑話稿に、「文化の頃より天保の始、皇學家平田篤胤なるものあり。……此人學問に長じ、博學智識にて、皇學は勿論漢學も頗る長じ、佛學も修め、仙人學も心得居り。」又「平田篤胤は皇學漢學佛學等知らざる事なく智識の人なり」などと見えてゐる皇學は、勿論國學と同じ意味である。

この雨窓閑話稿には、「翁の皇國學に長じたるは申迄なし」ともあつて、この皇國學の意味で、皇學とも云つてゐるのである。皇學叢書などといふ叢書の名も、これと同じ意味のやうであるから、長谷川昭道のいふやうな、あらゆる學術技藝を總稱する全體的な學藝の呼稱とは、おのづから意味を異にするものである。かやうに、この呼稱には、廣い意味と狭い意味との二つが用ひられてゐる。平田篤胤や鈴木重胤なども、この皇學といふ呼稱を用ひたやうである。

日本學といふ呼稱については、江戸時代に富永不盈齋といふ人の日本學大意といふ本があるが、これは文政八年冬に成つたもので、内容は、わが國家の大道を説き、陰陽の理によつて、わが國の優越性を論じてゐるから、國學の態度とは大分違ふところがある。併し、かういふ呼稱が古く見え

ることは注意すべきであらう。

この日本學といふ呼稱が、廣く用ひられて來たのは、明治二十年代になつてからで、あたかも當時は、わが國の文化についても、國家的な自覺が興起して、日本を冠した種々の名稱が生じてゐる社會一般の趨勢に相應じたものである。明治二十二年には、日本學誌といふ雑誌が出て、哲學館講義録の中には、日本學といふ題目の中の國語の講義を、關根正直博士がされてゐるやうである。

かやうに、日本學といふ呼稱は、和學、國學といふ呼稱に比すると新しく生じたものであるが、上來述べた、篠崎東海、本居宣長、橋守部、河村益根、平田篤胤のごとき諸家の意見によれば、なほ論すべき呼稱であると申してよいかと思ふ。

以上、主として、江戸時代の學者が用ひ、學書に見える呼稱、特に、國學派、又は、それに近い思想の人々が、わが國の學問に對して、いかなる呼稱を用ひたかについて、解説を加へたのである。

最後に申し述べたいことは、宣長翁は、和學、國學のいづれをも斥けられて、皇朝學といふ名稱を

たてられ、同様の精神であらう、吉田活堂らは皇國學と稱した。併し、和學と國學とは、少し目的が違ふかと思はれる。和とか日本とか扶桑とかいふ言葉は、さうむやみに、使ふべきでないことは、或は、河村益根の言の通りであらう。同時にそれは、外國と對等の立場を示す呼稱でもあるからである。併し、國學といふ呼稱は、それとは違ふやうに思ふ。恰度、學問と云へば、わが國の學問しかないのであるから、特に和學などと云はなくてもよいといふのと同じことで、國と云へば、われわれには、わが國よりないのであるから、そのわが國の學問といふ意味で名づけられた國學の呼稱は、和學や日本學などといふ呼稱とは、同一に論じられないのであつて、宣長翁が、漢學などと區別するときには、皇朝學と云へばよいとて、皇朝學といふ呼稱を用ひられ、或は吉田活堂らが皇國學といふ呼稱を用ひたのと、同じ意味を、この國學といふ呼稱の中には含めることが出来ると思ふ。篤胤翁が、伊吹於呂志の中で、わが國は、禁裏様の御國であるから、みくに、おんくにと尊んで申すのが本當である。世間の人が常に、日本でどうしたとか、或は日本人がどうしたなどといふが、さういふべきことではない。それで、自分が、みくにと申したなら、此の皇國のことと心得るがよいと云つてゐるが、國學の意味も亦、そこにあると思ふ。ただ、皇國學のやうに、皇の

字をつけないが、併し國と申しただけでも、愛し尊む意味は含まれてゐるのであつて、少くとも、和學などといふ呼稱と、同類の呼稱ではなからう。その上、以上述べた呼稱の中で、これが最も歴史が古いのである。さういふ歴史上の傳統と内容とを照し合せるとき、われわれは、宣長翁の議論にもかゝはらず、この呼稱につくことが出来るのではないかと思ふ。

なほ一言すると、私が、この問題を取り上げた精神は、宣長翁がうひ山ぶみで「此事は、山跡魂をかたむる一端なる故に、まづいふなり」と學問研究の方法の最初に申されてゐる、その精神にあることを申し添へたいと思ふ。

## 歴史の潮流

此の頃の社會狀勢は、私に明治二十年代のわが日本の有様を思ひ起させる。それは、明治時代における、最初の強烈な國粹思想擡頭の時代であつた。

此の時代に、かゝる日本の思想が起つたのは、もとより當然の理由のある事であつて、それ以前の、殊に、明治十年代の歐化思想といふものは、極めて熾烈なるものがあつた。思想界においては、極端な自由民権思想が行はれてゐた。それは、一方から見れば、近代の共產主義思想にも比すべきもので、即ち、フランス大革命の、あの革新思想が公然と行はれてゐたのである。一般の風俗の上から言つても、上流社會には洋装その他の洋風の生活様式が模倣され、ダンスが盛んに行はれて、所謂鹿鳴館時代の一時期を劃したのである。それはさながら、近年までの、社會一般の狀態と甚だ近似した所があつた。

尤も、その意識には大分違つた所があつて、例へば、民間に革新思想が行はれたのも、その目標は

どこにあつたかといふと、結局政府に對する攻撃であつて、封建時代の存残物である藩閥政府を打倒する事が、彼等の目的であつたのである。フランス流の革新思想は、此の目的の爲めの手段として、用ゐられたのに過ぎなかつた。それで、かゝる藩閥政府を制肘する爲め、憲法が制定せられ、帝國議會が開設せられる事になると、彼等は最早さうした革新思想に依據するの必要を認めなくなつたので、思想界における、極端な自由民権思想も、明治二十年代に至り終熄するに至つた。それは必ずしも當局の彈壓によつて終熄したのではなく、帝國議會開設といふ歴史的な事件が、最早彼等をして、その反抗的な火の手をあげる必要のない程までに、これに満足を與へたからである。實際明治十年代における、自由民権思想は、當局の彈壓くらゐでは終熄出来なかつたもので、非常なる彈壓にあつて、多くの人々が投獄せられ、東京を追放せられ、新聞雑誌の發禁、停止は頻々として起り、各地に騒動が起るといふ不穩の情勢を示した爲めに、死の道を選んだ人も決して少くなかつた。さういふ騒然たる状態は、必ずしも、彈壓の爲めのみで終熄せしめる事が出来るものではなく、却つて、その爲めに嵐に吹きまわられて益々火の手があがる一方である。現今の政界の名士で、當時此の彈壓の爲めに苦酸を嘗めた人も決して少くはない。それが、國會の開設により、彼等の希

望が満たされたと感ずる事によつて、自然さうした情勢が熄み、一轉機の時期を劃したのである。

又、鹿鳴館時代のダンス流行も、當時は、外國と不平等條約を結んでゐて、築地には治外法權の外國人の居留地があり、さながら、今日の支那に、外國の租界が置かれてゐるのと同じ状態であつたから、それを平等の條約にしようとして、外務當局は非常な苦心をしてゐた。それで、わが國人が外國と對等の條約を結ぶ爲めには、生活が外國人と同様でなければならぬといふので、わが國人の生活を、急速に外國人と同様のものにならうとして、日常の生活様式を洋風にしたり、ダンスパーティーを盛んに開いたり、銀座街をすべて煉瓦建の洋風建築で埋めたり、併し、此の洋風建築には借り手がかず、空屋が多くて困つたといふ話である。それで後には折角建てたものを、又取り壊すやうにもなつたのである。いろ／＼な事をやつて、外國人に、その生活程度の高くなつた事を誇示しようとしたのである。併しこれも、明治二十二年の帝國議會開設、帝國憲法發布、明治二十三年の教育勅語の下賜などといふ、歴史的な大事件と時を同じうして、條約改正といふ大問題も、外國との交渉がととのつて、十分とは行かないまでも、ほどその目的を達する事が出来たので、自然鹿鳴館時代も終熄を告げる事となつた。

さて近年の歐米思想輸入時代は、明治十年代の歐化時代とは、もつと思想的根柢が深く、そのやうに、表面的皮相的なものではなかつた。それだけ時代は、比較にならぬほど進歩してゐるのであるが、併し又、かゝる外來思想や外國風俗の旺盛な時代の後に、現在の如き國體思想の勃興して來るのは、歴史の進展に徴して見ても、極めて當然なる事情であつた事を知る。たゞ、此の思想の入れ代りが、明治十年代から二十年代に移つた際のその如く、スムーズに流れてゐるかどうかといふ事になると、可成り疑問がある。いづれにしても、かゝる歴史の潮流を見通して、その必然性を重んずる事は、とられてよい、必要な態度であると思ふ。

## 第二章 古典に就いて

## 古典と現代

古典と云はれる書は、それが何らかの意味で現代的意義を有してゐるものである。現代に殆ど全く存在価値を持たないやうな古代の書を、古典と云ふ事は出来ないし、又、古典として取扱つてもゐない。

そこで、問題は、古典の現代における生き方にあるのである。これについては、大體二つの事が考へられてゐた。一つは、古典を歴史的価値あるものとして、現代に直接の生命は持つてゐないが、その歴史の流れにおいて、即ち、文化の系譜の祖先として、その血統が現代にまで流れてゐる、そこに古典の現代的意義を見出さうとする考へ方と、もう一つは、古典は直接に現代にも生きてゐるといふ考へ方とである。

たゞ此所で考へられなければならない事は、古典の生命を、一個の物質の如く、固定したものとせられてはならない事である。それが眞實の古典である限りは、古典は常に成長し發達して行く。

古典の生命は、その作られた時代にだけ働いてゐて、その時代が過ぎると、全く枯死してしまふやうなものであつてはならない。古典は、いつまでも生きて、各の時代の息吹を吸込むのである。さうして、その時代の呼吸をしては、常に新しい生命を持つて生きてゐる。それ故に、文化が進歩すれば、それに應じて、古典も亦、大きい進歩を遂げるのである。

萬葉集は、決して大和時代にだけ生きてゐたものではなく、源氏物語は、決して平安貴族時代においてのみ価値を持つてゐたのではない。江戸の平民時代になつても、萬葉集や源氏物語は、その時代にふさはしい生命を興へられて、江戸時代らしい生き方をしてゐたのである。明治以後の、外國文化によつて文學諸藝の方面にも、異常な進歩が見られた時代においても、わが國の古典はやはり、現代の生活に最も適當した方向において新しく生かされる事が出来るのである。いや、さうした生き方が可能でないとすれば、それは最早古典でも何でもないのである。さうして、さうした意味の古典が一つもないといふ事になれば、わが國の過去の長い歴史において、何らの文化的遺産を現代に傳統してゐないといふ事になる。そんなおろかな話があるものではない。古典は儼然として存する。

眞實の文化の向上は、古典的教養によつて、國民生活の根柢が、高雅な情趣の上に築かれる所に見られる。さういふ意味から云へば、わが國は、未だ眞實の現代文化を持つて居なかつたのだと云つてよい。なぜなら、わが國民の古典に對する教養の低さは、外國に比して遙かに劣つてゐるからである。外國の文學藝術に對して、自國の古典的藝術の價値を多くの國民が眞實に認識する事が出来るほどの教養を備へて來た時、はじめてわが國民は、文化的な向上を見たと云つてよいのであるが、現在においては、まだまださういふ時期に到達してゐない。従つて、明治、大正、昭和の急激な國家の發展も、文化の方面から云へば、未だ文化以前の時代なのであつた。或は、眞實の文化を建設する準備時代なのであつた。文化の正しい意義における、眞實の文化的な時期は、今後に期待せられるのである。

教養の低い大奥の女中でも、種彦の作を通じて、源氏物語の概要を知る事が出来た江戸時代の文化は、その時代が一つの文化の完成期にあつたといふ意味で、現在の文化よりも、高かつたといふ事が出来る。明治維新の破壊によつて、此の完成せられた江戸時代の文化は、拂拭せられてしまつた。併し、それにもかゝらず、古典は存する。古典をして、現代的な新しい生き方をさせなければならぬ。

ばならない。短歌の現代における未曾有ともいふべき隆盛は、實に短歌の古典を、外國の文化によつて推進させられた新時代の藝術の觀念により、新しい生命を與へた所から生じてゐる。さういふ點では、源氏物語を、現代に生かし得ない、現代の小説の方が、短歌よりも、むしろ文化的には劣つてゐるといふ事さへ云はれるのである。

併し、初等教育においても、源氏物語の價値を知らしめ、古典の眞の意義を覺らしめようといふほどに、現代の教育は進んで來た。從來に比して、一層の國民文化の向上を目ざすものと云つてよい。かうした教育によつて導かれた新時代の人々の將來に、眞實の文化の建設を期待する事が出来る。古典の生命は、あらゆる國民の階層を通じて、その精神生活の奥底に浸み込む事が出来るであらう。

かうして、古典は直接に現在に生かされるべきであるが、又、それは、文化的系譜の祖先、功勞者としても、われわれの精神的矜持の中に生きてゐるのである。われわれは、英雄の言行に接する事によつて、直接に鼓舞されて、それがわれわれ現代の國民としての言行の中に映發されるとともに、又、その人々がわれわれの祖先である時に、その矜持の念が、一層われわれの生活を通じて、

精神的影響を與へる所が多いのである。古典においても亦同じである。古典の歴史的價値と、その現代においても生きてゐる本質的價値とは、一であつて、二であつてはならない。

もし此の兩者が分裂するなら、或は單なる古典の歴史的價値を憶ふのみで、恰度、没落する士族が、祖先の手がらを追憶し、效果のない矜持の中に衰滅して行く如き、現代的な復活の生命を持ち來たさなない悲劇を演ずるであらうし、又、その現代における本質的價値を追求するのみでは、遂に、わが國の古典は、なほ、シェークスピアやゲーテやトルストイの如き、外國の古典に遙かに價値が劣るといふ、われわれの血に何のつながりもない、はかない評價を與へる結果にも立ち至る事になるであらう。従來の古典の現代的意義に關する意見の扞格は、此の點を統一して考へる事を忘れた怠慢より生じたものである。此の兩者が、常に一つのものとして現代に生かされてゐる所に、古典の眞實の價値が見出されなければならない。

## 愛すること

明治十年代の歐化思想の後明治二十年代に國粹思想の勃興した如く、かういふ思想の交替や轉換は、文化の進歩する途上、必然的に生じる波のうねりであつて、現在の自國文化に關する關心の高まりは、大正時代の輸入唯物思想に對する、當然の反撥であり、しかも、これは決して、文化の後退ではなく、反對に、文化の進歩を示す、當然の現象なのである。

ただ、現在の日本文學の關心といふのは、甚だ低劣なるを免れないのであつて、婦人の場合では、せいゝ、茶の湯、活花同様乃至それ以下の教養の一つぐらゐにしか考へられず、男性においては、未だ日常の話題にさへならない程度のものである。徒然草を語り、近松を談ずるよりは、ジツドを読み、アランに感心するのが、一般の知識階級の狀態であらう。

日本の古典文學は現在生きてゐるか。まだ現代の日本においては生きてゐないと僕は思ふ。日本人の極く一部にしか過ぎない國語教師が古典を取扱ふのは、生活や地位の爲めといふ、挾雜物が大



分入つてゐて、やむにやまれぬ魂の欲求として、これをやつてゐるのではないやうである。況んや、他の専門學者や、作家に至つては、自國の古典に、その研究の生命を見出し、作品の精神を繼承するものは、殆どない。

併し、全然ないわけではない。極めて徐々にはあるが、その方向に向ひつつある。此の國文學専門家以外の多くの學者や作家に、普く自國の古典が行きわたり、取りあげられる時、はじめて、古典が現代に生きたと云はれるであらう。さういふ日が来るかどうか、それは分らない。僕らとしては、さうある事を望み、さういふ方へ努力すべきだと思つてゐる。

ただ古典は、すべての現代人の批判に堪へるであらうか。だが、われわれは批判よりも、先づ愛する事を求める。批判のない愛は盲目の愛に過ぎないのであつて、それはやがて不良の子を育てるのに役立つだけであるとも云はれるであらう。それにもかかはらず、既に生れてゐる子供に對して必要なのは、先づ兩親の限りなき愛である。批判はその次に來る。われわれは、何よりも先きに、自國の古典を、魂の底から愛せよと云ひたい。愛なき批判は最もよくない。さういふ日本文學への態度ならば、むしろ、日本文化の進歩に害があるだけであるから、存在しない方がよろしいのである。

### 國文學研究の精神

かつて芳賀矢一先生が、ロンドンで講演せられた「日本精神」と題する講演を、佐藤春夫氏が譯されたものを讀んで、感動したことがある。

その中で、芳賀先生は、次のやうに云はれてゐる。

「それでは日本文學の最も重要な特徴は何であらうか。我々の文學史を瞥見するとき、我々は少くとも二つの異つた特色を發見する。それは凡ゆる形式の文學にも、また、如何なる時代の文學にも現はれてゐる要素で、その第一のものは「天皇に對しての忠義」であり、第二のものは「自然に對しての愛」である」

さうして、此の二つの特色を主として、わが國の文學史を概観してをられる。

自然に對しての愛をわが國の文學の特色として、その點から、わが國の文學史を考へた人々は、今までにも少からずあつた。併し、天皇に對しまつる忠義に、わが國の文學史の特色を認め、その點

から、わが國の文學精神を考へた人は、殆どなかつたと云つてよい。

一體、自然に對する愛は、わが國の文學だけの特色であるかどうかといふ事に對しては、多少の疑がなきを得ない。支那の文學を見ても、唐詩などには、随分自然を歌つてゐて、自然に對する愛の深いことが認められるし、又、わが國の繪畫で山水を重んじる風は、支那の宋畫あたりの影響と思はれ、室町時代以前の繪畫としては、佛畫でなければ、風俗畫を主とする大和繪派が中心である事を思へば、自然に對する愛の藝術的表現は日本だけに見られる特色ではないといふやうな氣がする。

併し、これも、芳賀先生の云はれたやうに、「凡ゆる形式の文學」又「如何なる時代の文學にも現はれてゐる要素」といふ點から考へると、或はわが國の文學だけに見られる特色であるかも知れない。とにかく、此の點については、從來も多く觸れて來られたところである。

ところが、天皇に對しまつる忠義の精神に至つては、わが國の文學だけに見られる特色であるにもかゝらず、何故か、此の點を主として説かれたものを見ない。しかも、これこそわが國の文學精神の最も重要な要素でなければならぬのである。此の點はもつと強調せられなければならない。

いことであるにもかゝらず、從來の國文學の研究から輕視せられてゐたのは、何かさういふ所に重點を置く研究を、曲學阿世とか便乘主義とかいふ風に考へる偏見があつて、所謂科學的精神から距離があるやうにも見られる傾きがあつたからである。併しそれが非常な誤であることは、今はもう明かとなつてゐるであらう。

私は、さういふ方面においての力強い研究が、今後も數々起つて來る事を希望してゐる。

芳賀先生の「日本精神」は、富山房百科文庫中の「日本人」と題する一冊に収録してある。これは、日本國民には誰でも讀んでもらひたい文章であると同時に、特に國文學者に讀んでもらひたい文章であると思ふ。

## 日本の理想と國語教育

私は、高等學校で國文學を教へてゐるのであるが、國語といふ教科が、中學校より高等學校へと、上級の學校に進むに従つて、何故に、一般の學生から輕視せられ、又、興味を持たれなくなるのか、非常に不審に思つてゐた。併し更に考へ直してみると、興味を持たれなくなる度合は、國語の教科だけが甚しいといふやうな事ではなく、一般の學生について考へて見ると、年齢が進むに従ひ、學校の各種の學科に、興味を感じなくなるのは、大體平均してゐるのであつて、それが特に國語において著しいといふやうな事は云はれないやうである。それで、少數の篤志家ともいふべき學生だけは、國語に興味を持つものもあり、又、ある種の勉強家は、各科にも平均して精を出してゐるやうで、特に國語だけを怠けるといふやうな事はない。

但し、國語が外國語に比して輕視せられるといふ傾向はあるやうであるが、これはたゞ難易の差だけにとゞまらず、特に國語の時間数が、外國語に比して著しく少いといふ點に起因してゐるらし

る。

そこで、國語が輕視せられるといふ風潮に對しては、國語の時間数を増す事によつて、これを除去する事が可能なのであり、國語が興味を持たれないといふ事に對しても、それは、たゞ國語科そのものだけの責任ではなくて、各學科ともに、同様に興味を持たれないのであるから、學校全體の責任といふべきものである。即ち、これらの事實は、國語科擔當の教師だけの責任に歸するものではなく、むしろ、現在の學校組織、或は、教育制度そのものの責任とすべき性質のものなのである。

これは國語だけの問題ではないが、今までの教育が、初等教育の方では、生徒の興味を引く事も出来るのに、上級の學校に行くほど、學生の氣持が學科から離れてゆくといふのは、その學科の内容が、學生の生活から次第に遊離して行く所にあるのではないかと思ふ。尤も、學生自身の智能が発達して、殊に、所謂生意氣ざかりの年頃ともなれば、學校とか教師とかを輕蔑する所に一種の快感を覺える衝氣も生じて來るのは當然であるが、それにしても、それよりも、學科目そのものが、彼らの生活に、氣持にびつたりと宛てはまるものがないから、さういふ結果を生じる所が多いので

あらうかと思はれるのである。

彼らは正直である。自分の要求する所と否とを、はつきりと態度と行動とに示す。さうして、現在の教育の方法が彼らの欲するものではない事を、明かに示してゐるのである。そして今更學生狩のやうな事をして見ても、現在の教育制度、學校組織である限りは、それはどうにもしやうのない事なのである。

現在の教育の一番の缺陷は、第一に、生活から遊離した知識しか教へてゐないといふ事である。第二に、それらの知識が断片的であり、又、學校全體として、別個の學科が、それぞれに何の連絡もない、切れ切れのものでしかないといふ點にある。第三に、學科そのものは生活から遊離してをりながら、學生はこれを、自分の將來の生活の手段に利用しようとしてゐる。これは實に現在の學校生活の最も大きい矛盾である。

これを取りすべて云へば、現在の教育において、最も大きな缺陷は、その中心となるべき理想が確立せられてゐない點にあるといふ事になるのである。或は、その理想を昂揚する爲めに、すべての教育が統一せられてゐるといふわけではないといふ點にあるのである。理想を失つた教育ほど、

悲しむべきものはない。それはたゞ、觀念としての道德を教へ、生活からは遊離した知識を教へてゐるのに過ぎないのであつて、そこには、殆ど何らの教育の意義をも見出す事は出来ないのである。

教育が生活と密接に結びつく爲めには、行動的である事を必要とする。此の點も亦、從來の教育觀念は違つてゐた。學生を社會から絶縁して、ひたすら狭い學校の内部に閉ぢ込めて置かうとする。それが爲めに、學生は自己の學んでゐる學科が、自己といがなる關係にあるのか、はつきりとその意義を悟る事が出来ないで、たゞ與へられたる境遇に自己を、いかにうまく適應させる事が出来るか、それをのみ考へるやうになる。かくて、學生の氣風はいよいよ小さく、無氣力となり、従つて學科に對する興味を失ひ、たゞ、與へられてゐるが故に仕方なく、これをやるのだといふやうになつて、全くみづから自分の生活を創造して行かうとするやうな、創造的、建設的、進歩的態度を見る事が出来なくなつてしまつたのである。

今にして、最も必要な事は、學生に理想を與へ、その理想に向つて行動を起すやうな教育を施す事ではなければならない。さういふ點に、教育の中心目的が置かれ、さういふ目的に對して、教育の